

聖徒の道

ハロルド・B・リー大管長
1899—1973



だれか母親の愛を究めることのできる者はいるだろうか。だれが母親の貴重な役割のすべてを理解し得るだろうか。母親は神にすべてをゆだね、神の導きのままに、あなたがたや私に生命を与えるために、死の陰の谷を歩むのである。

ソロモンは書いている。「あなたを生んだ父のいうことを聞き、年老いた母を軽んじてはならない。」(箴言23:22) 母親を忘れてはならない。いつも母親のことを心に留めていなさい。

人は母親を思い起こすとき、悪をなすことをやめ、本来の自分に返る。

母親に対する心からの愛を示すひとつの確かな方法

は、母親が忍耐強く教えてくれたように、真理に従って生活することである。この高貴な目標は、私たちの時代に初めて与えられたものではない。モルモン経には、当時アメリカ大陸にいた2千人の青年の指導者として義なる戦いをした、ヒラマンという勇敢で義しく気高い指導者のことが書かれている。

ヒラマンは、この青年たちの働きを次のように述べている。「……われは……次に言うような偉大な勇気を見たことがない。……『……われらの神はわれらと共にましまして必ずわれらを倒れさせたまわないから、われらは行って

戦おう。……』と(彼らは)答えた。(彼らは)まだ戦ったことがなかったが死ぬことを恐れず……また疑いを抱かないならば神が必ず自分らを救いたもうとその母から教えを受けていた。かれ

らはその母の言葉をわれに話して『われらの母はわれらに教えたことを自分で確かに知っている。われらはこれを疑わない』と言った。」(アルマ56:45-48)

戦いが終わってヒラマンは次のように書いている。「嬉しいことに一人も失わなかった。まことにかれらは神の限りない力を得たかのように戦った。人がこのように不思議な力で戦ったことはいまだかつて例のないことであった。…」(アルマ56:56)

不思議な力、神の限りない力—母親の愛、と母親に対する愛が勝利をもたらしたのである。

次の真理を心に留めておこう。—母を忘れぬ者は神を忘れず、母を忘れる者は神を忘れる。なぜだろうか。それは、神と母親、創造と愛と犠牲と業をわけもつ、このふたりの神聖な人は「ひとつ」だからである。

われわれは、思いと行ないによって神と母親を敬おうではないか。謙遜に、また熱心にイエス・キリストの御名によって祈る。ア

—メン。

心の糧

トーマス・S・モンソン

も く じ

	心の糧	トーマス・S・モンソン
194	大管長会メッセージ/正しい答え	N・エルドン・タナー
198	イワン	アンナ・シーマン
200	質疑応答	
203	生ける水の井戸	ディーン・ジャーマン
206	「逸話集, 近代の使徒の生涯より」	レオン・R・ハートショーン パーレー・P・プラッター
211	子供に「できる」という気持を	ダーラ・ラーセン・ハンクス
213	アロンとみつばち	キャロリン・グレックナー
216	ペンテコステの日	
218	おともだちの作品	
220	おもちゃばこ	
221	愛し合い, 許し合いなさい	O・レスリー・ストーン
224	従 順	N・エルドン・タナー
229	贖い主イエス・キリスト	マリオン・G・ロムニー
231	根本的な義務—神権	ロバート・L・シンプソン
234	「最も小さい者のひとり」	バッキー・スニード ラリー・K・ラングロイズ
237	ローカル・ニュース	
	新しい教会幹部	

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
デルバート・L・ステイプレー
リグラント・リチャーズ
ヒュー・B・ブラウン
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー

諮問委員会

J・トーマス・ファイアンズ
(内務伝達部長)
ジョン・E・カー (配送翻訳部長)
ドイル・L・グリーン
(教会誌編集主幹)

ダニエル・H・ラドロウ
(教会教課企画調整主任)

統一誌編集主幹

ラリー・ヒラー

日本語コーディネーター

八木 沼 修 一

ローカル編集

高 木 まりゑ

今月の表紙

ロスアンゼルスのマレット・スミス撮影による、リー姉妹が最も好まれている大管長の写真

聖徒の道 5月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-8-10
配 送 東京ディストリビューション・センター
東京都港区南麻布5-10-25
定 価 年間予約 1,300円 1部 130円
海外予約 1,800円

正しい答え

第一副管長 N・エルドン・タナー

「あなたがたは、聖書の中に永遠の命が
あると思って調べているが、この聖書は、
わたしについてあかしをするものである」

(ヨハネ 5:39)

今日、青年も数多くの大人も、様々な疑問を持ち、それに対する真実の答えを熱心に捜し求めている。これは、自分たちの人生の進むべき道を見つけ、さらに万人が追い求める平安と成功と幸福とを見出そうとしているのである。そうした疑問の中には、時代を問わず人々が答えを捜し求めているものがある。例えば、「私はどこから来たのか」「なぜここにいるのか」「どこへ行こうとしているのか」などの疑問である。

これらの疑問は、青年が多くの人々と交わり、また大学などへ進学するにつれて、一層ふくれ上がる。その上、絶えず新しい疑問が起こり、様々の疑惑も頭をもたげてくる。何も知らない青年は、答えを求めて、博識な人々のもとへ出かけて行く。この人々は、学生たちの要求に答えるために、雇われて教え、助けている人々である。だが、たびたび見聞きすることは、大学の教授の多くが、科学的な疑問に対する答えを捜し出すことにのみ奔走しているということである。このような人々は、人生の物質的な面にのみ時間を費やし、霊的な事柄を無視し、その上、科学的方法で証明されないことや、経験から見たり、触れたり、立証したりできないことは何も受け入れようとしないのである。

しばしば指摘されることは、これらの^ニ似非知識人には、霊的な面や宗教的な面を無視したり、嘲笑したりする傾向があるということである。彼らは、そのような質問に答えることが自分の尊厳を傷つけるものであると感じているらしく、人と神との関係、人がこの現世にいる目的、またどのようにし

たら一番幸福になれるのか、どのような準備をしたら神の御許に帰って永遠の生命を享受できるのか、といった疑問には固く口をつぐむのである。青年は、このような人々のところへ話を聞きに出かけるのであるが、こういう人々は概して、完璧な真理や人生の疑問に関する正しい答えを教えられたこともなければ、自ら苦勞して学ぼうとしたこともないのである。これは残念なことではあるが真実である。彼らは霊的な事柄についての関心が薄いために、間違ったことを教えてしまったり、神を信じ、またみたまに満たされている人々を嘲笑してしまうこともたびたびある。彼らは人々に、心を開き、可能な限りの真理を学ぼう説いてはいるが、その彼らが、事、宗教的な問題となると自分の心を閉ざしてしまうのである。

私が強調したいことは、科学の一分野に秀でた科学者が、他の分野では必ずしも権威者ではない、ということである。それならば、この世の物事にしか精通していない人々が、自らを宗教問題の権威者であるなどと考えることは、いかに馬鹿げたことであろうか。しかもこのような人々は、宗教問題に関する学識が浅く、福音に対する浅薄な認識しか持ち合わせていないのに、それにかかわりなく、福音が真実でないと主張したり、福音を信ずる人々を嘲笑したりすることができると思っているのである。

イエスは、「いったい、天国ではだれがいちばん偉いのですか」と尋ねられたとき、幼な子と呼び寄せ、次のように言われた。「よく聞きなさい。心をいれかえて幼な子のように

ならなければ、天国にはいることはできないであろう。

この幼な子のように自分を低くする者が、天国でいちばん偉いのである。

また、だれでも、このようなひとりの幼な子を、わたしの名のゆえに受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。

しかし、わたしを信ずるこれらの小さい者のひとりをつまづかせる者は、大きなひきうすを首にかけられて海の深みに沈められる方が、その人の益になる。」(マタイ18：1-6)

私たちは決して、神の子供たちをつまづかせたり、その信仰心を冷やしたりするような罪を犯さないよう、心しようではないか。

教師たちがこのことさえ知っていたならば、教えるために必要な話題は聖典の中に数多く書かれていることがわかるであろう。イエス・キリストの福音の教えを受け入れ、それに従って生活するならば、一層の理解と知識が、聖霊と神のみたまを通じてもたらされるようになることであろう。人は聖霊によって一切の事の真実であるかどうかをわかるのである。こうして、学識は高められ、伝達能力、教授能力は飛躍的に増大するであろう。みたまの賜が彼らの上に働くからである。これらの賜については、聖典中に種々列挙してある。

末日聖徒イエス・キリスト教会は、首尾一貫して、神の栄光は栄知であると教え、また、人が知識を得るより先に救われることはない、と教えてきている。また教会では、その会員たちが、自分のためになるあらゆるものは、すべて添えて与えられることを認識して、「まず神の国と神の義とを求め」(マタイ6：33)るよう、励ましている。

聖典には次のようにある。「心をつくして主に信頼せよ、自分の知識にたよってはならない。すべての道で主を認めよ、そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」(箴言3：5, 6)

また、救い主は次のように約束された。「求めよ、そうすれば、与えられるであろう。捜せ、そうすれば、見いだすであろう。門をたたけ、そうすれば、あけてもらえるであろう。」

(マタイ7：7) これは、祈りによって救い主を呼び求めよとの万人に対する呼びかけである。科学の分野での答えが欲しかったら、その関心のある分野の最高の権威者のもとへ行けばよい。だが、「私は何者なのか。なぜここにいるのか」といった、人の人生を大きく左右する問題の答えが欲しいときには、宗教の分野の権威者のもとへ行き、聖典に記録され

たまの主の御言葉を研究しなさい。祈りを通して神の御許へ行き、予言者の声に聞き従いなさい。

リー大管長が次のように説明したのは、至言である。「啓示されたイエス・キリストの福音の中と、教会の指導者の教えの中から、あらゆる疑問に対する答えを見つけ出すことができる。永遠の父なる神の子供たちである全人類の社会的、物質的、霊的福祉に不可欠な、様々の問題に対する解決法を見つけ出すことができるのである。」

今日の世界で、その必要性が最も大きいものは、神を信ず

キリストの福音の教えを受け入れ、それに従って生活するならば、一層の理解と知識が、聖霊と神のみたまを通じてもたらされるようになることであろう。人は聖霊によって一切の事の真実であるかどうかをわかるのである。



る信仰であり、その御子イエス・キリストを信ずる信仰である。これが、あらゆる行動力の源泉なのである。最近、母親をなくしたばかりの、ある著名な博士の話を聞いた。その博士は、学生たちに、自分たちの信仰を持ち続けるよう説き勧めたそうである。博士の言葉は次のようなものであった。

「あなた方の中で、神を信ずる信仰を捨てた人々がいたら、その人は、やがてそれを後悔する日が来るであろう。科学が全くその力を失うような日も来るであろう。あなた方がこれらの問題に真面目な気持で取り組むよう、勧める。信仰からは、決して他の方法では得ることのできない、慰めや安らぎが生まれる。宗教というものが、一見、非科学的であるという理由で、それを捨ててきた人が数多くいる。最終的には、信仰は科学的であるとの評価を得るであろうということを、私は信じて疑わない。」

神を自らにかかわりのある神として認め、聖典を神の御言葉として受け入れる科学者は、同時に、あらゆる科学的な原則を運用し、学術的な訓練を積み、他の科学者と同じように速やかに、かつ高い段階まで進歩することができる。しかもそれと同時に、人生の他のもっと大切な面にも目を向けることができ、それが極めて大きな、心の平安をもたらしてくれ

るのである。こうした一段高い次元の上に立ってはじめて、進歩も成功も幸福も一層大きなものになるのである。日頃、神や祈りについての考えを嘲笑していた人が、ひとたび破滅寸前の状態から救われるや、「神のおかげだ」と叫んだ、というような話を聞いたこともある。また、いよいよ危機に直面すると、心ならずも、「神様、助けて」と祈った人もいる。窮地に立つと、無神論者などとは言っておられないのである。

聖典は、私たちに人生の指針として、また青写真として与えられている。聖典を読むと、人が神の姿かたちにかたどって造られたこと、また、肉体を与えられて死すべき人間としてこの地上に送り出され、ここで学び、備えをなし、天父の御許に帰る資格のあることを証明する必要があることなどをはっきりと理解できる。もし私たちが約束された祝福を望むなら、聖典の教えを受け入れ、それに従って生活しなければならない。そうでなく、教えを拒み、予言されている苦汁をなめることもできる。



「あなたがこの秘密をあらわすことができたのを見ると、まことに、あなたがたの神は神々の神、王たちの主であって、秘密をあらわされるかただ。」

(ダニエル 2 : 47)

なぜ人は世の創造主である神の御言葉を受け入れようとし
ないのか、しかも、なぜ、無鉄砲にも他人の信仰心に水をさ
そうとするのか、私には全くもって理解することができな
い。誠に、創造主自身が持つておられるような権威、知識、
理解力、そして事実の裏付けなどは、だれひとりとして持ち
合わせていないのである。科学とて、すべての答えを持つて
いるわけではないということを、どんな科学者でも認めている。
そして、何か組織された英知というものがあつたはずで
あり、しかも日ごとに、科学者たちが、科学と宗教の間に共
通点を見出しつつあるということも、科学者の間で広く認め
られている。それでは、なぜ信仰のみによって、聖典を受け
入れないのだろうか。そうでなければ、過去、現在にわたっ

て見事に成就した数々の予言の書かれている聖典を根拠にそ
の真正さを認めて、それを受け入れようとならないのはなぜだ
ろうか。

これのひとつの顕著な例が、モルモン経の中の、救い主の
降臨に関する予言と出来事の記録の中にある。長年の間、予
言者たちは、この偉大な出来事に先立って起こる様々のしる
しと状態について予言していた。だが、不信仰な者たちは、
予言者の言葉の成就する時は過ぎた、と言い始めた。そこで
ついに、不信仰な者たちは、日を定めて、「予言者サムエル
の予言したしるしが現われなかったならば」(Ⅲニーファイ
1 : 9) その言い伝えを信ずる者を皆、殺すことにした。

ニーファイは「熱心に主に祈りを捧げ」、その晩、しるし
が与えられた。予言されていた通り、その日は太陽が沈んで
も暗くならなかった。そのとき、不信仰な者たちは、非常に
驚いて地に倒れ、神の御子が確かに間もなく生まれるに違
いがないということを知ったのである。そして、実際に御子はお
生まれになった。

そのような出来事は、教会の歴史にも、一般の歴史にも、
数限りなく記録されている。民が、主や予言者の言葉に耳を
傾けようとならないときは、与えられた警告をあざ笑い、それ
に従って備えをしようとならない人々に必ず災いが下るのであ
る。

いまだかつて、記録の上で立証されている出来事を論破で
きた人は、ひとりとしていない。予言者たちも一般の人々も、
また群衆も、救い主御自身の声を聞き、姿を見たと言証してい
るのであり、さらには、しばしば奇跡とも言える状況の下で、
救い主の御力と栄光を身をもって体験したと言証しているので
ある。

旧約聖書の予言者のひとりであるダニエルは、極めて力強
い、また活気に満ちた記録を書き残している。ダニエルは、
神の実在について、そして神がその子供たちに対し、いかに
関心を払っているのか、いかに交わっておられるのかについ
て大胆に証した。ネブカデネザル王の話を思い起こしてみよ
う。王はあるとき夢を見たが、王の博士、法術士、魔術士の
うち、ひとりとしてこの夢を解き明かすことのできる者がい
なかった。このため王は怒って、博士たちを死刑にするよう
命じた。ダニエルもこの命令の対象になったが、彼は熱心に
祈りを捧げて、主に助けを求めた。すると、神はダニエルに
その夢を示し、その解き明かしを啓示された。命を救われた

ダニエルは、ほめたたえて言った。

「神のみ名は永遠より永遠に至るまでほむべきかな、知恵と権能とは神のものである。

神は時と季節とを変じ、王を廃し、王を立て、知者に知恵を与え、賢者に知識を授けられる。

神は深妙、秘密の事をあらわし、暗黒にあるものを知り、光をご自身のうちに宿す。」(ダニエル2：20—22)

ダニエルは王のもとへ行き、神に啓示されたままにその夢と解き明かしとを王に告げた。すると王は、へりくだって言った。「あなたがこの秘密をあらわすことができたのを見る

聖典は、私たちに人生の指針として、また青写真として与えられている。聖典を読むと、人が神の姿かたちにかたどって造られたこと、また、肉体を与えられて死すべき人間としてこの地上に送り出され、ここで学び、備えをなし、証明する必要があることなどを、はっきりと理解できる。

と、まことに、あなたがたの神は神々の神、王たちの主であって、秘密をあらわされるかただ。」(ダニエル2：47)

私たちには聖典があり、イエス・キリストの福音があり、高潔で非の打ち所のない人格を持つ何万という誠実な人々の体験と証がある。また、私たちには神権があり、私たちの只中には、神の予言者がいて、主は今日も、この予言者を通じて私たちに語りかけておられる。「およそ聖霊に感じたる時語るところはことごとく聖典の言となり、主の意となり、主の精神となり、主の言となり、主の声となり、世を救いに導く神の能力となるべし。」(教義と聖約68：4)

あなたがたのうちだれでも、神の予言者を通じて与えられた聖典や啓示以上に、人生の諸問題に対する良い答えを見つけ出すことができるなら、また、よい解決法を見つけ出すことができるなら、そして、論理的に何ら非の打ち所のない教義を見つけ出すことができるなら、やってみていただきたい。世界で最も優れた訓練を受けた頭脳の持ち主や最も観察眼の鋭い科学者でさえ、イエス・キリストの教えを受け入れなければ、決して神と人との関係について答えることもできなければ、それを説明することもできないのである。そし

て、そのイエス・キリストこそ、神の指示の下に世の創り主となられた御方なのである。

私たちのまわりにこれだけの証拠があるならば、完全な教義を教える必要性に、またキリスト教の倫理と原則に立ち帰る必要性に、さらには、自ら教えていることの真正さを靈感を受けて知り、理解する教師の存在の必要性に、疑いをさしはさむ余地があるだろうか。私たちは、まず家庭から始めなければならない。両親がまず率先して聖典を読み、その上で子供たちを励まして聖典を研究させたり、正しい所で正しい答えを求めるように指導しなければならない。青年は、世の中に出てから直面する様々の試練や敵に備えるために、まず家庭で信仰の砦を築かねばならない。この点に関し、主ははっきりと述べておられる。「……われは汝らの小児たちを光明と真理の中に導き来れと汝らに命じたり。」(教義と聖約93：40)

心を開き、また敬虔な気持で、科学的、学術的研究にも、イエス・キリストの教えにも同様の関心を払う人は、決して信仰を捨てることがない。疑惑、懐疑、そして不信心は、悪魔の武器であり、義の敵であり、また、成長と進歩の道に立ちふさがり障壁である。神について学び、イエス・キリストの教えについて学ぶことを恐れたり、恥ずかしがったりしてはいけない。

だが、聖典を読み、知っているだけでは、充分ではない。戒めを守ること、すなわち、御言葉をただ聞くだけの者とならずに行なう人になることが大切なのである。主が与えて下さった偉大な約束は、私たちが主を認め主のみこころを行なうための、充分なきっかけとなるはずである。

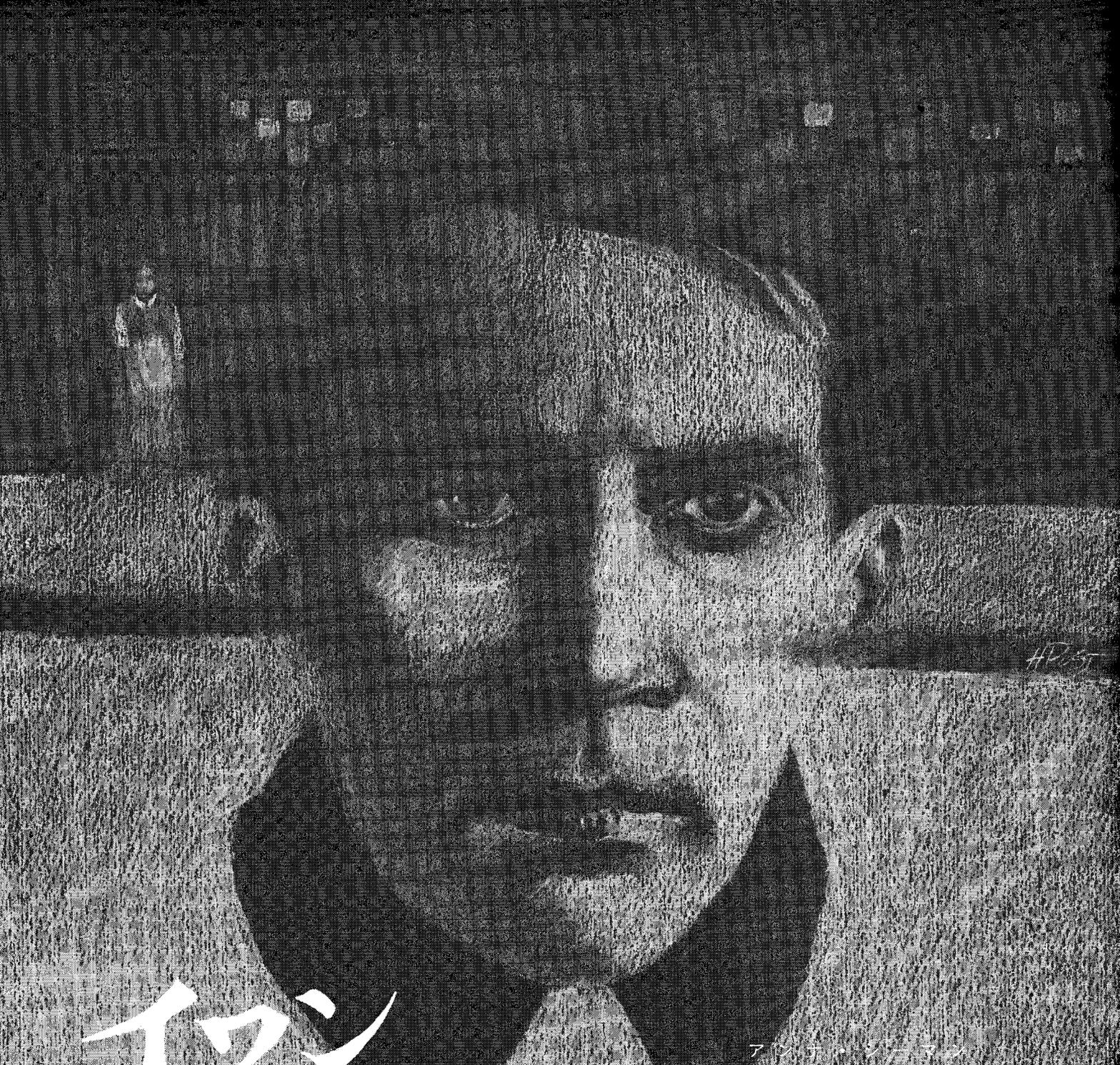
「およそこれらの言葉を憶えて守り且つ行い、この誠命に従って歩むすべての聖徒らは、そのへそに健康を受けその骨に髓を受けん。

また知恵と知識の大いなる宝まことに秘れたる宝を見出さん。

而して走れども疲れず、歩けども気を失うことなからん。

主なるわれ彼らに一つの約束を与う。すなわち、さつりくの天使はイスラエルの小児たちが如く、彼らを過ぎ越して屠ることなかるべし。」(教義と聖約89：18—21)

私たちが聖典を研究し、永遠の生命に至る道を見出すときに、この輝かしい約束が成就するよう、心から願うものである。



イワン

アグネ・シーマン

1945年の第2次世界大戦終結直後、私はチェコスロバキアのボヘミア地方に住んでいました。夫は戦死し、私はふたりの子供をかかえて生活のために働かなければならなかった。

戦後まもなくのことだ。洋裁師が仕事をみつかるのはむずかしいことでした。そこで私はふたりの婦人と一緒に小さな作業場に勤め、洗濯物の積みをすることになりました。私たちの小部屋の隣りには、男の人たちが大勢働く大きな作業場がありました。

通りのすぐ下階には、ソ連軍を相手にするパン屋がありました。そこを経営していたのは、ふたりの実名と筆名の下士官でした。その軍人の中のひとりに、「イワン・雷帝」と呼ば

れる青年がいました。20歳前後と見られるこの青年は、手をつけられない放蕩者のようで、ほとんどいつも酔っぱらっていました。上官はいつも彼を罰し、仲間もかんかんが怒って彼をなぐったり、不満がたまるせきしたときはど首をこづきまわすことがよくありました。

ある日、青年は立ちのちやうとの有様で、ぼろぼろと私たちの作業場に入りこんできました。私は彼が何か言いたい様子であることを察したのですが、他の人たちは彼をつかまえて叩き、階段の下に突き落としました。私は憤りも同情に身を翻わせました。なぜなら、イワンはただ助けが必要な不幸な青年に見えたからです。

それから数日して、仕事の手取り賃をとりと残率をして

475

いと、夜遅く10時頃、廊下に重い足音が聞こえ、ドンドンとノックする音がしました。こんなに遅い時刻に見も知らぬ人にドアをあけるのは、よほどのことでないかないことでしたが、神様を強く信じていましたし、少しも怖いと感じませんでした。ロシア語で「どなたですか」と聞くと、聞き覚えのあるイワンの声がありました。ドアをあけると、イワンがめっつと突っ立っていました、酔っ払って。私は気さくに話かけて、彼を部屋に招き入れ、椅子をすすめました。

「親切な人なんですね、アンナ・アントニヤさん」と、彼は言いました。

「どうしてかしら、あなたは私のこと何も知ってないでしょう。」

「いやあ、みんながぼくを叩いたときに、あなたの目を見たんですよ。それですぐにわかった。……おふくろもやさしい目をしてる。」

私はイワンが感じやすい青年だということを知り始めました。同僚たちが彼を冷たく追い返してから、私は彼に対していつもすまない気持がしていました。彼は病気で、私は何かしてあげなくてはとも思いました。私は彼のすぐそばに椅子を寄せて、「イワン、どうしてそんなにお酒を飲むの」と尋ねました。

彼はただうめくだけでした。

私は母親が話しかけるような調子で言いました。「イワン、何でも話してちょうだい。お役に立ちたいの。何かとっても悲しいことがあるのがわかるわ。でもどうしていいかわからないで困っているんでしょう。」

そう話しかけると、イワン「雷帝」はテーブルに頭を落として泣き出しました。私もしばらく泣きました。それから、私は静かに、悩みを話してほしいと言いました。すると彼は心の中を打ち明けてくれました。

イワンはソ連の貧しい漁師の家に生まれました。敵軍が侵入したときに、わずかに15歳だったイワンは、家の前で父親とふたりの兄が処刑されるのをいやおうなく目にしました。母親は殺されなかった、彼女は聖い人だったから、とイワンは話してくれました。お母さんは毎日聖書を読んでいたので、イワンはそう思っていたのです。でも、今彼はお母さんが無事でいるかどうか知りませんでした。ここ半年イワンの居場所が定まらないので、お母さんからの便りは届きませんでした。

私はそれを聞いたとき、神様がなぜ彼のこともっと知りたいという感じを起こさせたもうたのか、わかりました。ソ連のどこかで、信仰篤いお母さんが息子のために祈っていたのです。

私はゆっくり時間をかけて、あなたの友だちとして何かお役に立ちたいと、イワンに説明しました。イワンは落ち着いてきました。私は、以前に隣りにいた人が、酒におぼれて体がマヒしたことを話しました。お酒はやめるように、やめな

ければあなたもひどい病気になると忠告しました。お母さんはきっと、またあなたに会える日を待ちかねていらっしゃるでしょう。私は聞いたことはだれにも話さない約束し、お祈りのしかたを知っているかと聞きました。イワンはよく知りませんでした。私は、ベッドに入る前にお祈りをするように言いました。それから私たちは作業場を出て、彼を宿舎に送ってから家に帰りました。

それから数日、イワンが姿を見せる気配はありませんでした。そのうちパン屋からひとりの軍人が作業場にやってきて私に面会を求めました。その人は、部下にイワンという兵士がいて、あなたに自分が大病だと言われたと話している、と告げました。あれ以来、イワンは何も食べようとしなくてベッドに寝たきりだとのことでした。私はその人に、イワンを助けてあげたかったので、ある病気のことを話したと説明しました。その軍人の方はわかって下さり、ちょっとパン屋まで来て、イワンに病気ではないと話してほしいと頼みました。すぐに出かけて行くと、イワンは話の通り、ベッドにまわってなくなっていました。

イワンは私の声を聞くと起き上がりましたが、顔色は血の気がひいて青ざめていました。私は自分の話がこんなに重大な結果を招くとは、思ってもみませんでした。イワンの容態を少し聞いてから、私はあの日あなたに病気がするというつもりはなかった、ただお酒をやめなければ病気になるかもしれないと言っただけなのだを説明しました。彼は少しびっくりしたふうでしたが、前より元気になりました。でも、確かにイワンは熱がありました。手首をとって、脈拍を計ってから、イワンに大丈夫よと言いました。温かいお風呂に入れば、もっと気分が良くなるというと、イワンはそうすると約束しました。それで私は部屋を出ました。

その2日後、イワンは私を作業場に訪ねてきました。しらふでござっぱりとした格好で、人なつこく私にお母さんの服を縫ってほしいと頼みに来たのです。私は喜んで縫ってあげました。それはお母さんへ送るイワンの最初の小包になりました。

イワンはその後よく働き、彼に対する悪い評判は何も耳にしなくなりました。2カ月後に彼はお母さんに会いにソ連へ帰り、私はイワンとはもうそれきり会えないものと思いました。ところが彼が出発して数週間後、町で買物をしていると男の人がかけよってきて私の手をとったのです。一瞬はっとなりました。声を聞くまでは、それがまさかイワンだとは思わなかったのです。彼は見違えるように元気になっていて、お酒の臭いはまるでありませんでした。

1946年の春にソ連軍はチェコスロバキアを離れ、二度とイワンには会えませんでした。しかし、彼はきっと立派なすばらしい男性になっていることでしょう。隣人への小さな愛が奇跡をもたらすことを、私は証できるのです。

質 疑 応 答

ここで与えられている解答は、解決の一助となるものであり、教会の教義として公式に宣言するものではない。

「安息日にしてもよい活動は、どのような活動ですか。プロ・スポーツの観戦はどうでしょうか。」

解答／エルドリッジ兄弟

「安息日を敬い、聖く過しなさい。安息日は週のうちに聖別された日だからである」という、聖典中の命令を引用せずに、この質問にお答えすることはできません。今も昔も、いかなる時代においても、これは天父の戒めでした。

しかしいろいろと観察してみても安息日を聖別された日とすることが私たちの生活にとって正しいことであり、意味のあることであるか否かを知ることができることは確かです。

人間は霊と肉の二重の存在です。私たちの霊体が私たちの肉体に宿っているのです。霊は人に個性や人格を与え、人を動機づけ、人に理解や悟りを得させます。霊は天父と相通するものです。しかし霊も肉も栄養と訓練が必要です。このふたつが必要とする栄養と訓練は多少の差はありますが、互いに関係があります。

肉体は食物と運動が必要です。種々のスポーツ競技は理想的な体を造りあげるのに、ぜひ必要です。教会ではスポーツプログラムを通して、すべての若人にスポーツに参加するよう奨励しています。スポーツは楽しい活動であるばかりでな

く身体の必要を満たしてもくれます。これは週日の大切な「食物」ですが、日曜日に必要とする食物は少し違います。日曜日は、より霊的、内的な必要を満たすために聖別された日です。教会に出席し、聖餐を受け、隣人に対して最もよく奉仕できる方法について考えるならば、安息日は十分価値あるものとなります。人生のプログラムと福音に思いをはせ、私たちの受けている祝福について考えてみるならば、安息日は私たちが人生において、錨をおろす場であると言えます。教会に出席し、聖餐を受け、隣人に奉仕することは、人に最良のものを与える食物であり、日曜日はこのために理想的かつ最適な日と言えます。

おそらく、バランスという言葉が鍵になるでしょう。バランスがとれているということは、私たちの霊と肉が満たされているということです。

正しい日に正しい食物をとるようにしてください。このバランスをよくとっている人々は幸福な人々であるというのが私の見解です。そのような人こそより価値あることを成し遂げることができるのではないのでしょうか。正しい方向に動いている人の生活には心の平安と進歩への意欲が現われていることでしょう。

安息日を敬い、聖く過ごすことは、すばらしいことです。それは、私たちが本当に必要としているものを知っている御方、私たちが自己の永遠の進歩と幸福を託した御方から与えられたものなのです。



W・ジェイ・エルドリッジ

地区代表

プロミストバレイ・プレイハウス支配人

「私は3人のティーン・エイジャーを子に持つ者ですが、教会の服装やみだしなみの標準についての問題が絶えません。なぜ教会ではそのように外観を大切にするのか納得のいくように説明してやるには、どのように言えばよいのでしょうか。」

解答／マクミン姉妹

外観を意識しないティーン・エイジャーはほとんどいません。彼らは大抵の大人よりも外観を意識します。理由はここにあります。

服装とみだしなみの目的が常に保温と慎しみを越えたものであったとは必ずしも言い切れません。昔は好みではなく必要から、ほとんどの人が同じようなものを着ていました。しかし王や宮廷の人々は、地位や富を示すために特別な服を着ました。ですから着ているものを見れば、その人がどのような社会に属しているかがわかったわけです。

今日私たちが必要からではなく好みによって服を着るときにも同じことが言えます。私たちの服装は、私たち自身が何者であるかを物語っています。私たちの社会では、ある種の社会集団を表わすために、その社会集団の人々が同じ服装をします。たとえば警官、花嫁、ロックミュージシャンなどがそれです。服装が無言のコミュニケーションとなって、その人がどのような集団に属するかが、一目でわかるのです。もし私たちが、その集団に属していると思われなくなったら私たちはそのような服装をしてはなりません。端的な例として、もし私たちが宣教師であると思われたいければ、私たちは宣教師らしい服装をしなければならないでしょう。

教会の指導者たちはずっと、服装やみだしなみは最も効果的なコミュニケーションの方法であると認めてきました。それは、教会の指導者たちが、教会の会員たちはある種のグループに属する人々であって、他のグループに属する者ではないことを知らせたいと望むからなのです。

またもし服装が他に対するコミュニケーションの手段であるとするならば、それは自分自身に対するそれでもあります。その人の服装によって、その人が自分自身をどのように考えているかがわかります。私たちの服装の選択は、私たちのふるまいにも影響してきます。

服装によって左右される立居ふるまいの端的な例をひとつあげてみましょう。たとえば、ピクニックには結婚披露宴に

着るドレスは着られません。

もしスーツやおしゃれ着をピクニックに着て行くならば、楽しみの機会は大分制限されるでしょう。

もうひとつの例として、ボーイスカウトが制服を着たときのふるまいがあげられます。スカウトたちは制服を敬うという責任を感じて、制服に合うような行動をします。

十二使徒定員会補助のスターリング・W・シル長老は、その著書「美点の探究」(A Quest for Excellence)の中で次のように書いています。「人の外観は、単なる外的な問題以上の問題である。なんとになれば、醜悪な様は、私たちの生活のある部分に根をおろすやいなや、たちまちすべての部分へとひろがっていくからである。」

「食べ物で人がわかる」とよく言われます。また「着る物で人がわかる」というのも真理です。服の価格や流行は問題ではありません。私たちがどのような人間であるのか、自分をどのように感じているのかを表わすことが問題なのです。

リタ・L・マクミン

ブリガムヤング大学服飾学助教授





女はイエスに言った
「主よ、あなたは、くむ物をお持ちにならず、
その上、井戸は深いのです
その生ける水を、どこから手に入れるのですか」
(ヨハネ 4:11)

FULL



生ける水の 井戸

ディーン・ジャーマン著
リチャード・ハル挿絵

「もう一度聖典を読めですって。私は2年間そうしてきましたよ。もう標準聖典を4回ずつ読みましたよ。」

私がインスティテュートのクラスで、1カ月間毎日20分ずつ聖典を読み、その聖句についてよく考えるようにというチャレンジを与えたとき、ある帰還宣教師はこう答えたものだった。

私はこのチャレンジを半ば好奇心から与えたように思う。私はこの若い世代の人々が1カ月の間に、古代の予言者たちが聖典の中に発見し身につけたいくばくかの力を、自分自身で発見できるか否かを知らなかった。

ニーファイは次のように書いている。「……それは私の身も心も聖文を喜ぶので、私が心にそれをよくよく考えて私の子孫たちの学問と利益とになるようにこれを書き誌すのである。」(Ⅱニーファイ4:15) また、彼は彼の書いた言葉はその民に大きな影響を及ぼすであろうと語っている。

またさらにニーファイは、彼の言葉は真実であって、「この言葉は善を行えとあらゆる人に教え勧めている」と記している。(Ⅱニーファイ33:10)

ヤコブはシェレムとの邂逅の後のニーファイ人について、「それからは平和と神に対する愛とが民の間に回復され、民は聖文をしらべて二度とこの悪人シェレムの言葉に聞き従わなかった」(ヤコブ7:23)と書いている。

また、アルマは自分の言葉がいくらかのアモナイハの人々に影響を及ぼしたことについて、次のような言葉で述べている。「アルマが人民に話し終ると多くの人々はその言葉信じ悔い改めて聖文を研究し始めた。」

さらに、改宗して伝道の業に携わっていたモーサヤの4人の息子たちは、「まことに正しい理解をもっている者たちで、神の道を知るために熱心に聖文を研究したから、すでに真理について深い知識を持つようになっていた。」(アルマ17:2)

詩篇の作者は、次のように書いている。

いかにわたしはあなたのおきてを愛することでしょう。

わたしはひねもすこれを深く思います。

あなたの戒めは常にわたしと共にあるので、

わたしをわが敵にまさって賢くします。

わたしはあなたのおかしを深く思うので、

わがすべての師にまさって知恵があります。

わたしはあなたのおきてを守るので、老いた者にまさって事をわきまえます。

わたしはみ言葉を守るために、わが足をとどめて、すべての悪い道に行かせません。

あなたがわたしを教えられたので、わたしはあなたのおきてを離れません。

あなたのみ言葉はいかにわがごに甘いことでしょう。

蜜にまさってわが口に甘いのです。わたしはあなたのおきてによって知恵を得ました。

それゆえ、わたしは偽りのすべての道を憎みます。

(詩篇119:97-104)

私は、私の生徒たちに、ただ聖典を読むだけでは十分ではないことを理解さ

せようとして上記の聖句を用いた。予言者たちは、私たちがどのように聖典に接したらよいかを説明するために、きめこまかく、よく思いはかり、心に喜びをもって、ひとつひとつの言葉を用いた。私たちは、聖典を読むとき、その言葉を心に深く思いはかり、注意深く読まなければならないことは明らかである。私たちはまた、聖典を目にしていなくても、常に神の御言葉を反芻しなければならない。予言者たちは、そうするならば、みたまによる新たな洞察力と、さらに大いなる義を得ることができるであろうと約束している。

聖典は、聖句について考える際に二通りの方法があることを教えている。つまり聖句そのものについて考えること、そして聖句と私たちの生活との関係について考えることのふたつである。

モロナイは、モルモン経を読む人々が、その読んだことを心に深く考えるよう、熱心に説き勧め、この最初の考えかたについて教えている。またニーファイは、彼の父親の見たものについて心に深く考えているときに、みたまにとらえられた。(Ⅰニーファイ11:1参照)

またシドニー・リグドンとジョセフ・スミスはヨハネ5:29についてよく祈り、考えをめぐらしているときに開かれた。「われらこれらの事を思いめぐらせる時、主われらの覚りの眼に手を触れたまいたれば、われらの両眼開けて……」(教義と聖約76:19, 11-18も参照のこと。)

二番目の考え方は、ジョセフ・スミスは聖なる森へと導いた。予言者ジョセフ・スミスはヤコブ1章5節の聖句について次のように語っている。

「どの聖句にもまさって、この時ほどこの言葉が私の心に真に力強く迫って来たことはない。それは私の心の底と言う底を大きな力で貫き通すような気がした。私はこの言葉を再三再四思いめぐらして、もし誰か神よりの智慧を必要とするならば、正にそれは私で

あることを知った。……とうとう私はこのまま暗黒と混乱の中に止まらねばならぬのか、それともヤコブの指図をする通り神に願わねばならぬのか、どちらかにせねばならぬという結論に達した。」(ジョセフ・スミス2:12, 13)

このようにして、私たちは皆、闇をなくし光を増す決心をすることができる。私たちは私たちの読むことについて、次のように自問しなければならぬ。すなわち「今日の私たちの生活において、これはどのように応用できるだろうか。または、私はこのことから何を学ぶことができるだろうか。」

私は、もし私の生徒たちがこのような方法で聖典を読むならば、彼らはそこからニーファイやモロナイが受けたと同じ靈感を受けるに違いないという確信があった。私は、おそらくモルモン経が彼らに最も強い影響を与えるであろうと感じ、まずモルモン経を読むように勧めた。マリオン・G・ロムニー長老はこう語っている。「私はジョセフ・スミスの話によると同様、私の愛する人々と私自身の経験から、人は他の本よりもモルモン経を読むことによって主に近づくことができ、主に近くあることができるということを知った。」

私は、生徒たちの経験を評価するため、その月の終りに感想を書くように割当てた。

生徒たちの書いた感想文は、私の聖典に対する確信を、さらに確かなものにしてくれた。この割当てを不快に思っていた帰還宣教師は次のように書いた。「私はすばらしい経験をすることができました。私は、予言者たちが私たちに与えてくれた福音に対する知識と理解のすばらしさに、今また驚かされました。福音はこの数週間のうちに今までになく身近に思われてきました。そして、今までよりもはっきりと、人の信仰と証の強さは日々変わるものであり、常に新鮮な状態にしておく必要があるということを知りました。」

他の生徒の反応も同様に熱のこもっ

たものであった。聖典の勉強は、昔の予言者に影響を与えたと同じように彼らにも影響を与えたことは明白である。それは彼らの祈りに生气を与え、霊的な事柄に関する感受性を発達させ、創造性を増し、自制心を強め、生活態度を変えた。

ある生徒は、自分の良心が鋭くなったことについてこう語った。「私は自分の良心に照らして説明のつかない事柄を、自分で合理化しようとしなくなりました。特に婚約して以来、私は自分がある事柄について合理化しようとしていたことや、善悪の境目をもてあそんでいたことに気づきました。聖典を読むことは、私に力を与えてくれただけではありません。今私は聖典から受ける力を喜んでいるのです。」

また、いく人かの生徒は、新たに靈感を受けたと述べた。ある法科の学生は次のように書いている。「過去1年をふり返ってみて、私にとって顕著な出来事は、自分の霊性を保つ手段として聖典を用いるようになったことでした。その結果は明らかに霊を活気づけるものであり、私は今では、毎日の聖典勉強は生涯続けていかなければならないものだと確信しています。」

生徒会で活動しているある少女は、聖典を読むことが、学校にあって霊的に過ごす助けとなることに気づいた。彼女はこう話している。「私は30日間聖典を読むことを約束したので、30日間は読もうと決心しました。しかし、それでは余り益にはならないと思いました。そこで私はこれから生涯ずっとそれを続けようと思いました。それは約6カ月前のことでした。私は以来モルモン経を3回も読みました。ああ、何と違っていたことでしょう。それによって、常に私が不可能だと思っていたこと、すなわち学校に通っている期間を霊的に過ごすということができるようになりました。」

また以前は聖典に何の喜びも見出せなかったが、今は喜びを得られることを知ったという者もいた。ある少女は

こう書いている。「私は何回もモルモン経を読んでみました。そして読むたびに何か欠けていると感じていました。私は喜びをもって読むことができなかったし、何が原因でそうなのかわからなかったので、義務感からしか読めませんでした。しかし今年私は聖典を読むその瞬間瞬間を愛することができました。私は今、毎朝モルモン経を読んでいます。そしてそれは何にも替えがたいものだと思っています。私は毎朝聖典を読むという習慣を身につけることはおそらくむづかしいことだと思っていました。しかしそうではありませんでした。」

またある生徒は次のように書いている。「私は聖典を読むとき、目的もなく、ただ機械的に読んでいたので、読み始めはしてもすぐにやめてしまったものでした。私は2、3度モルモン経を読み始めましたが、ニーファイ第二書以降に読み進んだことはありませんでした。……しかし聖典や福音に対する私の態度は変わりました。私には証がなかったわけではありませんが、私の証は単に信仰の上に築かれた証であって、聖典の知識に基づいたものではありませんでした。今では私は福音をより深く理解することができるようになったと感じています。また、私自身に福音をいかに応用したらよいかもわかりました。私は家やクラスで聖典を読むとき、神とイエス・キリストを身近に感じることができ、善いことをしたいという望みを、今までより多く持つことができます。イノス書を読んだだけで、私の祈りは変わりました。」

生徒たちは、聖典を読むことによって自分がより神に近くなり、自分の生活全体が幸福なものになることを知った。寮で生活しているある少年は次のように書いている。「私はモルモン経の聖句を読んだとき、私の生活全体が何かスムーズになったように感じました。前よりも人と接することが楽しくなり、私の生活は前よりも清くなりました。以前私にとって祈ることは苦痛

でしたが、今は朝晩祈りたいと思っています。私は容易に習慣をコントロールすることができ、寮生活で感じるつき合いのわずらわしさからものができることができます。私は本当にこの気持ちをどう表現したらよいのかわかりませんが、ただ言えることは、神をより近く感じているということです。」

ある一年生の少女は次のように言った。「私は余りにも急激に生活が変わることに驚いています。どうぞ、皆さん自身についても考えてみてください。6カ月前、私はそのような短期間ではどのような種類の変化も起こり得ないと言っていました。しかし毎日聖典を読むようになって以来、私の生活態度は変わりました。私は以前聖典は昔の予言者の時代のものであって、今日では余り必要ないと感じていました。しかし私は、モルモン経を読み学ぶうちに、そこに書かれている原則を応用することによって、内なる力が得られることに驚かされました。私は、ただ与えるだけではなくその解決方法まで与えてくれるような進歩のためのチャレンジを、いつも見出すことができました。」

学園闘争で活動しているある帰還宣教師は、聖典を読み、それについてよく考えることによって自分の生活が変わったことを知った。「聖典の勉強は素晴らしい経験でした。これこそ当然続けるべきものです。私は学期の間に（2、3週間のあいだ）聖典を読まなかった期間があるので、読んだ時と読

まないときの違いをはっきり述べることができます。この聖典を読まなかった期間の前、そしてその時以後、日々の聖典読書は日ごとに興味が増し加わり、いつの間にか楽しみに読むようになりました。こうするうちに、私の思いは清められ、心は平安になり、私の人に対する態度は不快な気持を与えるものではなく、快いものを与えるものとなりました。そして私の思いは前よりも清く純粋になり、私の心は主と一致するようになり、前よりも幸福になりました。聖典を読むことを怠っていた間に、私は残念なことをいくつかしてしまいました。また、祈り望むこともただからまわりするだけでした。私は、心からの祈りと聖典を学ぶこととは、分つことのできないものだと思えます。私は勉強と全伝道活動を通して、特に他の言語で何度かモルモン経を読んで以来、モルモン経のことをよく知ることができたと感じました。中でも『心の中によく思いはかること』には何か特別な意味があるように思います。このようにして私は今、毎朝、本当に楽しい時間を過ごしています。」

聖典はすべての年代のためのものである。幼い子供たちでも、聖典を読み、よく考え、その真価を知ることができる。最近のことだが、ある父親が8歳と9歳の子供に日曜日ごとに4章ずつ新約聖書を読むようにとチャレンジを与えた。最初のうち、彼らはせきたてられなければ読まなかった。しかし、そうするうちに次第に興味をそそら

れ、日曜日以外の日も、聖書を読むようになった。そして、間もなく彼らは毎晩床につく前に読むようになり、新約聖書を読み終えてモルモン経を読み始めた。3カ月たたないうちに年上の子供はモルモン経を読み終え、また最初から読み始めた。

これらの経験から何を学んだかは明らかである。私たちは日々の聖典勉強をぜひとも始めなければならない。このようにするならば、私たちは教義と聖約63：23で主が語られた「生ける水の井戸」を経験することができる。マッケイ大管長は死の少し前、教会員たちに今までよりも日々啓示を受けるにふさわしくなるように、そして主から力を賜わることができるように努力しなさいと言われた。日々聖典に基づいた瞑想をするならば、私たちは救い主とその教えとみわざをより身近に感じることができる。聖典を読むという経験は、続けられ続けるほど自然なものとなり、すばらしいものとなるのである。ある帰還宣教師は次のように書いている。「伝道からもどって1年になりますが、私はずっと、少なくとも日に30分聖典を読むようにしています。今では読まないでいられなくなりました。そう、食事と同じです。」

予言者ジョセフ・スミスはこう言っている。「神に関する事柄は深い上にも深い。時と経験と注意深く思慮深く厳粛な思考のみがそれを見出す。」

その結果は明らかに霊が気づけるものであり、
私は今では、毎日の聖典勉強は
生涯続けていかなければ
ならないものだと思信しています。

パーレー・P・プラット

略 歴

プラット長老は、1807年4月12日ニューヨーク州バーリントンにジェレドおよびチャンティー・プラットの息子として誕生。

1830年、オハイオの家をあとに東部へ向かい、バプテスト教会の執事の家で初めてモルモン経に接する。この本を読んだ後、予言者に会いにパルマイラへ行くが、ジョセフ・スミスはペンシルベニアに出かけて留守であった。そこで兄ハイラムと話す。

1830年9月1日、セネカ湖でオリバー・カウドリからバプテスマを受け、同日夜の集会で長老に聖任されている。

1830年、オリバー・カウドリ、ピーター・ホイットマー・ジュニア、ザイバ・ピーターソンと共に、ニューヨーク以西に向かう最初の宣教師に召される。

彼は同僚と共に、福音を説きながら西へ2千キロ以上も旅した。ミズーリ州インデペンデンスに着くと、一行はインディアンに伝道を始めた。ショニー族やデラウェア族を訪れてはモルモン経の教えを説いた。

プラット長老は、この神権時代の初代の使徒のひとりであった。1835年2月21日、オハイオ州カートランドで聖任された。時にわずか27歳であった。

1836年にはカナダに伝道し、ジョン・テイラーを初め多くの人々にバプテスマを施した。

1840年、英国において「ミレニアル・スター」を創刊している。

1874年、ソルトレークへ移住。デゼレト仮政府の州憲法起草に参加し、議会議員に選ばれている。後にユタが合衆国準州となった際には、準州議会議員に選出された。

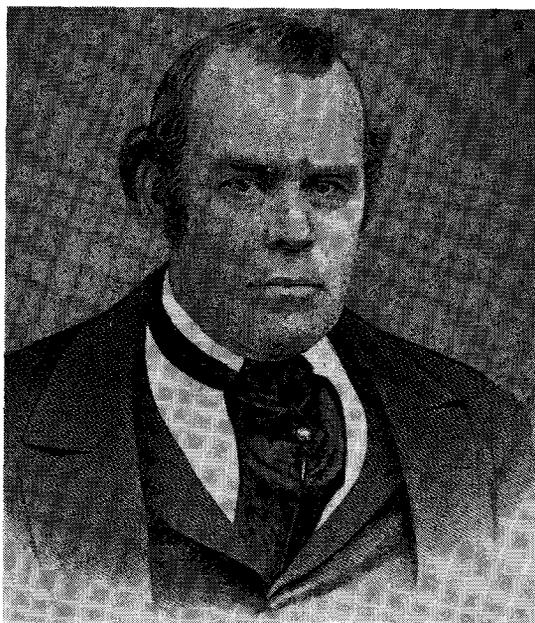
1851年、南米に派遣された最初の宣教師となる。

プラット長老は立派な作家、詩人であり、彼の書物は今も広範な読者層を得ている。

1857年5月13日、アーカンソー州バンビューレンで死亡。

次の物語は、大部分プラット長老の自叙伝から引用したものである。

「逸話集，近代の使徒の生涯より」 *Exceptional Stories from the Lives of Our Apostles* レオン・R・ハートション編，デゼレト出版社 1972年



「しばらく歩きまわっては、また腰をおろして、しばらく読むのであった」

ここにおいでの方々の中には、……私の証をまだ聞いておられない人があると思う。私は教会がニューヨーク西部の荒地で創立された最初の年から、この教会を知り、この教会につながってきた。教会は1830年4月6日に組織されたが、私は同年9月1日にバプテスマを受けて教会に入った。

私が教会員になったばかりの頃は、小部屋ひとつに全教会員が入った。そう混み合ってもいなかった。確か当時も50名にも満たなかったと思う。

私がこの業に関心を持つようになったのは、まずモルモン経がそのきっかけであった。偶然の機会から1冊のモルモン経を見かけたのである。その本の所有者は本の内容をほとん

ど知らなかったし、信じていかなかったが、たまたま手に入れたこの本のことを私に話して聞かせ、家に招いて読ませてくれたのである。それは予言者ジョセフ・スミスと父親が住む家から1日ほどの道のりの所で、私が自分の牧師の仕事をしにもどるときのことであった。というのは、当時私はキャンベル派ともバプテスト改革派とも呼ばれる教派に關係して、説教をしながら旅行していたからである。

私は当時熱心に聖書を研究していた。そして、聖書がよく理解できるように心を開いて下さいと神に祈った。すると神はみたまと理解力とを心に注いで下さった。それで私は聖典をかなり理解し、福音の字句とその全容と第一原則とを、聖書に書かれた通り真実なままに理解していた。私の心は開かれ、それらの事柄を受け入れていたが、力が、つまり福音の賜と権威が欠けていることは自分で承知していた。私はそれが回復されることを心から願っていた。なぜなら、その権威と力が回復されないうちは、予言されていることが決して成就しないことを知っていたからである。……私はひたすらそれを求めていた。みたまが私の胸に、生きているうちにそれが見られるとささやいたようであった。

私はそのような状態の中で、自分の持っていた光を人に分かち与えるために旅行をしていた。そのときに、先ほど述べたようにモルモン経にめぐりあったのである。私はモルモン経を入念に、熱心に読んだ。……読んでいるうちにそれが真実だという確信を持った。読み進む間に主のみたまが注がれ、私の心に照らし、私の判断を確認するのだった。そして真理が私の心に打ち込まれたのであった。そうして私は、陽光と夜の闇が見分けられるようにはっきりと、その本が真正なものであることを知ったのである。私はそのことを、天から聞

こえる声で知ったのでもなく、天使から聞いたのでもなく、示現を見たわけでもない。私はそれを、心の内の理解のみたまによって、私の内にある光によって知ったのである。私はモルモン経が真実であることを知っている。なぜならそれは光であり、聖典の言葉を成就してやってきたからである。私は、すわってそれを読んだ最初の日、すなわちハンブリンという名の年老いたバプテスト派の執事の家で、やってきた隣人にこの本は真実であると証をしたのであった。

その同じみたまが私を導いて、翻訳者のジョセフ・スミスを探させた。私は8月の酷暑の日、丸一日がかりで、足にまめを作ってジョセフ・スミスがいると聞く所に出かけて行った。夜に入ってようやく、当時はニューヨーク州オンタリオ郡のマンチェスターという小村のあたりに着いた。途中で牛追いの男に行きあったので、モルモン経の発見者で翻訳者でもあるジョセフ・スミスについて尋ねた。するとその男は、ジョセフ・スミスならそこから140キロあまり離れたペンシルベニア州にいと教えてくれた。それで私が予言者の父親のことを尋ねると、男は一軒の家を指さしたが、老人はどこか遠い所に出かけて不在だと言った。しばらく話をしてから、その男は名前をハイラム・スミスと言って予言者ジョセフの兄だと言った。彼が、私の初めて出会った末日聖徒であった。

私は会合に出て自分の仕事をすませると、翌朝再びハイラム兄弟の家に戻った。彼は私にモルモン経をプレゼントしてくれた。……私はしばらく歩きまわっては、また腰をおろしてしばらく読むのであった。というのは、その本を一気に読みあげてしまいたくなかったからである。私は、読みたいと思ったときにどンドン読む方法をとった。私は嬉しさと喜びに



満たされた。私の霊は豊かにされ、まるでこの目で見たかのように、主イエス・キリストがはっきりその姿をとって復活体で現われたまい、昔のアメリカの住民に導きを施されたことを生き生きと理解できた。主は確かに死からよみがえり、天に昇って、アメリカ大陸のバウンテフルの地に降られたのである。

さっき述べたように、私は約束していたふたつの会合に出席した。会衆は私の話を聞いて関心を持ち、もっと集会を開いてほしいと頼んできた。私は、しなければならぬ個人的なことがあるのでそれはできないと断わった。私が彼らに別れを告げてハイラム・スミスの所へ戻ると、ハイラムは私を35キロほど離れたニューヨーク州セネカ郡のある場所に連れて行った。彼はそこで私を、モルモン経の初めの方に名前が載っている3人の見証者と8人の見証者に紹介してくれた。私は3人の見証者のひとりで、当時教会の第二の使徒となっていたオリバー・カウドリと話し、翌日そろってセネカ湖へ出かけ、彼からバプテスマを受けた。彼は、証を読めばわかる通り、天使の訪れを受けた人である。

私はバプテスマを受けてから、同じ日の小さな集会で確認の儀式を受け、聖霊に満たされ、また長老に聖任された。これは1830年9月1日のことで、その日から今日に至るまで、私は自分の召しを全力を傾注して遂行し、神の与えたもうた神権を尊ぼうと努めている。

プラット長老の生活に起きた次の出来事は、1838年ミズーリ州ファーウェストでのことである。聖徒たちは当時激しい迫害のさなかにあった。ウィリアム・E・ベネットは「回復された教会」の中で、迫害の理由を幾つかあげている。

1. 聖徒たちは、前から住み込んでいた植民者とは違っていた。前者は大部分合衆国の北東部から来ていたが、後者はほとんど南部諸州の出身であった。当時この2地域の間には、非常に不信任感が横たわっていた。さらにミズーリ州西部は、まだ比較的未開な辺境地帯であり、法を逃れようとする社会の浮浪者たちを引きつけていた。他方モルモン教徒の植民者たちは、正直、節儉の徳を身につけ、覇気に富んだ人々であった。教徒たちは、すぐに農場を開墾し、立派な家々を建てた。

2. 聖徒たちは、シオンがミズーリ州ジャクソン郡に築かれるという約束を受けていた。以前からの植民者は、聖徒たちがお金を払って土地を入手することを知らなかった。その地域のモルモン教徒がふえるに従って、昔からの住民は全くそう感じる必要はなかったのであるが、脅威を感じ始めた。

3. 聖徒たちは、協同組合的な農場や事業を興して、すで

にこの地域に定着していた農場や諸企業と競合した。また聖徒同志一致団結し、仲間の間でしか結婚しなかった。

4. 当時、合衆国では奴隷問題で非常に緊張があった。奴隷を持つことは北部では違法であったが、南部では合法であった。奴隷をかかえている州とかかえていない州の数が当時同数であった。そして、この状態が続く限り、議会は奴隷制反対の法律を可決することができなかった。奴隷制に賛成の人々は、この均衡状態が維持されることを願っていた。

その頃、ミズーリ州は奴隷制賛成の州であった。しかし、この州に流入し続けるモルモン教徒は、奴隷を持たない人種であった。教徒の数がふえ続け、その上シオンはいつかミズーリ中をおおうであろう、と言っていたので、奴隷制に賛成していた勢力が脅威を感じたのは当然であった。奴隷を所有するミズーリ州の知事が、暴徒を鎮圧する行動に出なかった裏には、このことがあったと思われる。

5. 聖徒にとってもうひとつの悩みの種は、プロテスタントの牧師たちが抱く嫉妬であった。多くの牧師が、聖徒を襲う暴徒を率いるか、暴徒の仲間に加わったのであった。

追注：次の話の中で、プラット長老はある軍隊のことについて述べている。これは合衆国の軍隊ではなく、ボッグズ知事の指揮下にあった州軍であったことに留意しなければならない。この州軍は本来、聖徒の生命、財産を守り、暴徒との衝突を防ぐように命じられたものであった。しかし、兵士の中には同時に暴徒でもある者がたくさんいて、彼らを制御することは不可能であった。その上士官の中にも暴徒に同情する者が多く、自分の軍団を率いて聖徒を困らせる者もいた。遂にファーウェストにおける聖徒たちは、わなにかけられて兵器を放棄し、ジョセフ・スミス、パーレー・P・プラット、その他の指導者を敵の手に引き渡すことになってしまった。

「妻は頑張って生きて

と約束してくれた」

キャンプで、私たちは屈強な護送兵に監視され、大雨の中を、夜中身を隠す場所もないまま、屋外で土の上に寝ころんでいた。護送兵たちは夜を徹してあざけりの言葉を浴びせ続け、みだらな悪口で無頼漢ぶりをさらけ出した。彼らは神を冒瀆し、イエス・キリストをあざけり、恐ろしい呪いの言葉を口にした。ジョセフ兄弟たちをののしり、奇跡を要求し、しるしを求めた。「やれやれ、スミスさんよ、天使を見せてくれ」、「きさま、啓示をひとつくれよ」、「奇跡を見せろ」、「おい、このキャンプにいたきさまらの仲間の囚人をきのう奴の家に連れて行ってな、炬の上で下げてあったライフルで脳天をぶんなぐったらよ、そのままずっとおだぶつ寸前さ、

何か言って奴をなおしてやれよ、そうすりゃ信じてやるぜ」
「それから、てめえらが使徒とか神の人だったらよ、自分で逃げてみな、そしたらおれたちゃモルモンになるぜ。」後は呪いと瀆神の言葉の連続であった。そして娘や人妻を暴力で辱めたといやしい自慢話の長冗舌など、その多くはとても筆に表わせない。実際彼らの言葉を書こうとしても、そのままあからさまにはとても書く気になれない。そうしてそのひどい一夜は過ぎて行った。朝が来る前に別の人たちが何人か連れて来られたが、その中にアマザ・ライマン兄弟がいた。…

それから私たちは、全軍隊の指揮下に入ってファーウェストへ向かった。そして公共広場で休止している間、私たちは護送兵をつけて、衣服の着換えと家族に最後の別れをしに行く許可をもらった。囚人として8.5キロ離れたジャクソン郡に出発するためであった。

それは何よりもつらい経験であった。2、3人の兵士につき添われて、我家に向かうとき、冷たい雨が降りしきっていた。小さな小屋に足を踏み入れると、妻は熱病で床に伏していた。妻はそれまでかなりの間病気で寝ていたのである。妻は3カ月になる息子のナサンを胸に抱き、わきには5歳の娘がいた。そのベッドの足の方には、陣痛に苦しむ婦人がいた。彼女は夜中に家を追い払われて、3メートル四方の私の小屋に急場の宿をとったのである。私たちのそれより大きい家はすでに壊されてしまっていた。私はベッドに近寄った。妻はわっと泣き出した。私はひと言ふた言慰めの言葉をかけて、私と子供たちのために頑張ってくれと言い、何年離れようと、また必ず会えると話した。妻は頑張ってくれと約束してくれた。私はそれから小さな子たちを腕に抱いてキスをし、家を出た。

それまで、私は涙を押えてきた。しかし食料も燃料もなく、不毛の草原で家も奪われ、助ける人としてなく、人間らしさのかけらもない無法者の中に放置された寄るべのない家族を見て、しかも冬が近いというときに、どうやって耐えろと言うのだろうか。

「さあ、自由の身になるんだ」

こうして囚人としてではありながら、暫時自由を許されて移動しているときであった。ある朝起きてみると大雪で、そっと歩いて出ると宿舎からこちらが見えなかった。だれも私に気づいた気配がなく、呼びとめられもしなかったので、私

は冒険してみようという気になった。町を東に向かって歩いてみたが、だれも私に気づかなかった。それから野原に出ても、まだ見つからなかった。1キロ余り歩いてから森に入った。まわりは薄暗くしーんとして、そばには人っ子ひとりおらず、天は降りしきる雪にけむって、どんよりと鉛色であった。足跡は雪に消されて、私は自由の身であった。東の諸州へ通じる道はよく知っていたし、逃亡を邪魔するものは何もないと思われた。自由への思いに胸は高鳴り、妻や子供や家、自由、平和、法と秩序の地といったものがみな次から次へと心に浮かんだ。自分は別の州に行ける、家族を呼び寄せ、そろって幸せに生活できるのだ。

さもなければ、私は、法がすべて死に絶えた州の囚人なのだ。いつでも裁判なしに撃ち殺される状態で、凶悪な刺客に命をつけねられるのだ。刺客らはすでに公職者の誓いをすべて破り、名誉に関わる原則のすべてと、人間性までも踏みこじっていた。すでに老人や無力な女子供の血に染まった手が、私の背後に迫っているのだ。クルッキド川の戦いの結果、命を守り抜き、市民を暴漢や盗賊の手から救い出した勇敢な愛国者たちは殺人者呼ばわりされ、一方で盗賊たちは義勇軍に加わっている始末だった。

逃亡すれば自由であった。戻ればクラーク將軍のもとに送られ、殺人者たちを陪審員、死刑執行人として極刑に処せられるであろう。

「さあ、自由の身になるんだ！」誘惑する声がささやいた。

「いや、逃げない。」私は言った。「ジョセフ兄弟と仲間が敵の中にいるうちは決して！私が逃げれば、敵はどんな苦難の嵐を、あるいは死という災難をも、彼らにあげせかけるかも知れない。」

私はきびすを返すと、もと来た道をたどり、私がいなくことを気づかないうちに宿舎に入った。服についた雪を払っていると、番兵とジョセフ兄弟から、どこへ行って来たのかと尋ねられた。「私はちょっと運動をしに」と返事をした。ひどい嵐の中の散歩がちょっと話題になっただけで、話はそれっきりになった。

捕虜となっていた間中、私たちの心の支えとなったものがひとつあった。それは、主がジョセフ兄弟に与えた言葉である。すなわち監禁中、私たちの命は守られ、ひとりも欠けることがないというものであった。私は荒野の中で行くか戻るか思索していたときにそのことを考えた。そして次のような考えに打たれたのである。「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだすであろう。すなわち永遠の生命に至るであろう。」

「柔らかな手が

私の手の上に置かれた

ような気がした」

私たちはこうしたつらい境遇の中で、長くうっとうしい冬を過ごした。捕虜にならないですんだ私たちの仲間が州の外に追放され、家や財産をなくし、命を失った者も多くいた。数千の人々がイリノイ州に追われた。

妻は獄中の私を何回か訪問してくれたが、ついに州当局の定めたモルモン教徒退去の期限が切れ、遅れて残っていた私の妻子その他数名は、強制追放と死のいずれか二者択一を迫られた。

友も証人もおらず、いやたとえいたとしても、婦女子を追いたてて殺しかねない「ガデアントン強盗団」や殺人者たちに審かれるのだから、有罪を言い渡され、処刑されるに決まっていた。妻子が夫や父の保護なしに見知らぬ土地をさまよっているというのに、ここにぐずぐず悲惨な生活を送っていることは、死んでも死に切れない思いであった。

こんな状況の中で、希望と絶望の間を行きつ戻りつしながら断食と祈りの数日を送ったが、その間、心を深く傾げたひとつの問いがあった。たったひとつのこと、それだけが心を占めていた。もし地上の人間に語ったことのある神が天におられるとすれば、私は神からこの質問の本当の答えを知ることができると思われたのである。どれだけ耐えなくてはならないのかというのではない、自分がいつどのようにして解放されるかというのではない。それはただ次のことであった。すなわち自分は、いつかどれだけ先になってもよい、それまでどんなに苦しい目に遇ってもよい、自分は一体この世で再び自由になって、かつてのように愛する妻や子供たちとまみえ、自由に外を歩き、人なかに住み、福音を説くことができるのだろうかということであった。

それを確信させて下さい。私は願った。そのためにはどんな苦勞もいとわない。地球を一周し、アラビアの砂漠を横断し、荒涼たるロッキー山脈を彷徨することも、切なる望みを遂げるためには、もしいくつかがそれが確信できさえするならば、もの数ではなかった。断食と祈りと、それを主に尋ね求めた数日後、私は早い時刻に、孤独な寝室にひとり退いた。他の囚人たちと番兵が、獄屋の上の部屋で雑談しながら退屈をしのいでいる間、私は静かに横になり、祈りの答えを求めた。すると突然、みたまに捕えられたような気がして、

自分を囲む外界の事物が心に入らなくなった。天国の平安と安らぎが私の胸にしみ通り、霊の世界からひとりの人が訪れ、愛の笑みをたたえ、この上ない愛と同情のこもった哀れみの表情を豊かに表わして、私の前に立った。柔らかな手が私の手の上に置かれたような気がした。また輝く頬がやさしく温かく私の頬に触れた。聞き慣れた声が私に挨拶した。私はすぐにそれが若かりし時代の妻の声であると知った。妻は2年近く前から、悪人に苦しめられることもなくわずらいもやんだ地に、安らかに眠っていたのである。私は、妻とまみえ、私の問いに答えるためにつかわされたことを悟った。

それを知った私は一心に問いかけた。「私はこの世でいつか再び自由になり、家族や聖徒たちと会い、昔のように福音を説くことができるのだろうか。」彼女はためらいなくはっきり「はい」と答えた。私はそのとき、自分はそれを知るだけで充分だと言ったことを思い出した。しかしそのとき、私はもっと知りたいと思った。

そこで次のような問いが口をついて出た。「どのように、どんな方法で、あるいはいつ逃れることができるのか、教えてほしい。」彼女は答えた。「それはまだ知らされておりません。」私はただちに、そのような質問をして、自分の約束と信仰以上のことをしてしまったと感じ、今は最初の質問の答えに満足すべきだと思った。

妻のやさしい霊は私に別れを告げて退いた。私は我に返った。番兵たちの隠うつような話し声と年寄りの背教者の口論とけんかの声が耳に入ったが、私の心には天国と希望があった。

「イエス・キリストの御名により、

起きて歩け」

次の話は予言者とプラット長老、および他の人々がミズーリ州での不当な監禁を解かれて、イリノイ州で聖徒たちと再会したあとの出来事である。

私たちはクインシーの10キロほど北にある新興の町ノーブーに移った。ここに、ジョセフ・スミス大管長とミズーリの迫害の嵐に生き残った大勢の避難民が住んでいた。ノーブーはすでに四散した聖徒の集合地に指定されており、多くの家族が野外や木の陰やテントや幌馬車などに陣取っていた。数少ない古びた建物を購入したり借りたりして使っている人々もあった。またある人たちはミシシッピ川の対岸のモントロー

ズという所に幾つかある、以前は軍人のバラックに使われていた古い丸太小屋に住んでいた。

迫害にさらされ辛苦をなめてきたせいで、病気が蔓延していた。そこかしこ、どこを見ても半数を越す人たちが、悪性の熱病や悪寒などにさいなまれていた。

私たちは到着した当初、宿るところひとつない露天生活をした。私はここでジョセフ・スミス兄弟に会った。前年のリッチモンドのねつ造裁判以来の対面であった。再び自由な人間として互いに抱きあった私たちは、涙を禁じ得なかった。私たちは「いと高きところにホザナ」と心に叫び、去年の秋ミズーリ州ジャクソン郡に護送されたときに、しもべであるジョセフに告げられた言葉が成就し、私たちを自由にして下さった神をほめたたえた。ジョセフ兄弟は、決して忘れることのできない温かい同情と兄弟の親切をもって、私を祝福した。私はここでハイラム・スミスや投獄時代の仲間たちにも会った。言葉では決して言い表わすことのできない喜びと満足が、互いの内に燃えた。私たちの予言者、大管長の両親も、胸いっぱい喜びの涙を流して祝ってくれた。ふたりは私の手を取って子供のように泣いた。ああ、その涙は、ファーヴェストで人間の姿をした鬼どもに引立てられて行く私たちを見送ったときの悲しみの涙と、何と違っていることだろうか。

うれしい再会に心の丈を出し尽くしてほとぼりがさめると、私はジョセフ・スミスに同行してボートでミシシッピ川を渡り、モントローズの友人たちを訪ねた。そこでは多くの人々が瀕死の床に臥していた。その中には、1837年にニューヨーク市で一緒にあの目ざましい働きをした旧友の、主のしもべエライジャ・フォードがいた。彼はそのとき不治の熱病で危篤状態にあった。憔悴して言葉もなく、足は湿布され、目は落ちくぼんでいた。骨ばかりにやせて死の影が射し、屍とほとんど見分けがつかなかった。彼の妻はその体にとりすがって泣きながら、埋葬の衣装を用意していた。

ジョセフ兄弟は彼の手を取り、いかにも死者を生き返らせるかのように氣迫をこめた一声で、「フォード兄弟、イエス・キリストの御名により命じる、起きて歩け」と叫んだ。家から家へ近所全体に聞こえるほどの声で、まるで獅子の吠え声か落雷の音のようであった。すると即座にフォード兄弟が死の床からはね起き、足の湿布と包帯をひきはがし、手伝う暇も与えずにさっさと自分で服を着たのであった。……少し食物をとってから、私たちに同伴して家々をまわっては他人の世話をし、彼らのために一緒に祈ったり儀式を施したりしたのであった。その間人々は私たちのあとに続き、喜びと驚嘆をもって神をほめたたえた。同じようにしてさらに何人かが声をかけられ、いやされた。

「親は毎日の子供に対する接し方で、子供が自己の姿を心に形成していく素材を提供しているのです。両親の言葉や動作が、その子の絵姿をはっきり伝えます。子供が本当の自分の姿を建設的な姿勢で心に形成できるように助けてあげれば、その子のため、心の健康のためになります。」

子供に 「できる」 という気持を



「ポビーにだらしのない怠け者だと言ったところで、清潔好きなてきぱきした男の子にはなりません。ポビーは自分をだらしのない怠け者だと思い始めて、かえって良くない習慣が助長されます。」

ダーラ・ラーセン・ハンクス

8歳のビリーは、家族でハイキングをしていて、うっそうたる松の木の間をこちらに駆けてくる大きな黒い犬に気がつきました。ビリーは「熊だ、熊だ！」と叫んで逃げました。その恐がりようと思ったら、まるで本物の熊に出会ったときのようなのでした。ビリーはそうだと信じ込んだ通りに反応したのです。それはどの子供にも言えることです。

子供が本当だと信じているものは、子供にとって現実なのです。自分はこのような存在だと信じ込んでいる姿が、その子の行動を決めていきます。本当の姿を自分の姿として信じるように親が手伝ってあげると、子供の心は健康になります。

子供の進歩を阻害するもの多くは、間違った自分の像を信じ込んでいるところからきています。それが不適当な行動を引き起こすのです。もしジュリーという子が自分は愛されていたいと思ひ込むなら、本当は両親から深く愛されていたとしても、愛されていないように振る舞い、みじめな思いをすることでしょう。子供は、自分が信じ込んでいる自分の姿が本当かどうかなどと考えたりしません。ただその自分の像が正しいとして、反応するだけです。もしジョニーが自分はばかだと信じていれば（たとえ将来天才になれるほどの知能指数があっても）、その否定的な感じ方は、彼の行動を制約します。自分はばかだと感じているために、頭脳を働かせようとしないかもしれませんが、できないと恐れてしまって、本を読む気にさえなれないかもしれません。ジョニーは無意識の中に、「しなければ失敗もしない」と思うようになるでしょう。

親は毎日の子供に対する接し方で、子供が自己の姿を心に形成していく素材を提供しているのです。両親の言葉や動作が、その子の絵姿をはっきり伝えます。子供が本当の自分の姿を建設的な姿勢で心に形成できるように助けてあげれば、その子のため、心の健康のためになります。これはすべての両親が望んでいることですが、知らず知らずと否定的な姿を植えつけているのは一体どうしてなのでしょう。

もっと良くしようと欠点を指摘することは、だれでもしていますが、それが否定的な自己の姿を植えつける主犯です。ポビーにだらしのない怠け者だと言ったところで、清潔好きなたてきぱきした男の子にはなりません。ポビーは自分をだらしのない怠け者だと思い始めて、かえって良くない習慣が助長されます。子供は、非難されたり人前で恥をかかされたりするととても傷つきます。それなのに、親はよく、子供の性格や行動の悪い点をことごとくに指摘することが自分の責任であると思ひ込んでいます。批判ばかりする上司の下で働いたことのある人は、そういうことの劣かさをよく知っているで

しょう。ひと言もほめず、失敗や手抜きはさっそく指摘するような上司を持った部下は、意気阻喪し不幸に感じるだけで、仕事も長続きしないでしょう。あなたはどんなに小さいことでも良い実績を認めてあげることによって、部下にも自分の子供にも進歩を促し、彼らから協力を得ることができるのです。いつも否定的なことだけを目に留めていたら、失望と落胆が広がるばかりです。

もしあなたがあら捜しする親であったら、自分を弱点の面からしか見ない子供ができてあがるかもしれません。ハイム・ギノットは、「親子の間柄」(Between Parent and Child)という本の中でこう言っています。「子供は無器用だと言われたら、最初は『違う、無器用じゃない』と抗議するかもしれない。しかし、そうこうするうちに親を信じて、自分を無器用な子供だと思い込むようになること、があまりにも多い。その子はたまたま倒れたりつまずいたりすると大声で自分に言うかもしれない。『お前は どうしてこんなに無器用なんだ』と。そしてそれから、自分は無器用だからできっこないと考えて、機敏さを要することは避けるようになるかもしれない。」

(ニューヨーク、マクミラン社、1965年P.47, 48 [英文]) あなたの子供は、普通あなたの言葉を信じるものです。

ほめ言葉が効果を上げるには、子供が真剣に努力して成し遂げたことだけをほめなければなりません。申し分のない性格だと言われても、それがお世辞だとわかれればいい気持はしません。これは大人でも子供でも同じことです。両親が子供の行ないを正直に正しくほめたなら、子供は自分について積極的な良いイメージを持ち、それはやがて健康な心を育む礎石となるでしょう。子供が自分について良いイメージを抱くように導いて下さい。それは取りも直さず心の健康な幸せな人生を築く助けとなるからです。

ミッキーにいつも、あなたは家族のやっかい者だと言ってごらん下さい。彼は、自分は期待されているとばかりにもっといろいろな問題を引き起こすことでしょ。自分を正直だと思っている人が嘘をついたとき、自分らしくないと不自然な感じをぬぐいきれないように、ミッキーもおとなしくしているなんて、自分はこうだと信じている姿に合わない、そんなことできないと感じるかもしれません。

自己を否定的な目で見ると子供の心には、深刻な葛藤が生じます。自分の不従順な態度に良い気持を感じることができなくて、いつも自分に不満があるのです。しかもその自分の姿が本当だと信じ込んでいる限り、変わる見込みはありません。このように間違っって信じ込んだ自画像は、子供の変化成長を妨げます。「悪い」子供の反抗の多くは、そこから生じた不満が原因となっています。子供たちは意識の底で、自分に悪いことを期待し、事実そう思い込ませた周囲の人たちを恨んでいます。

こうして、子供は自分はこのようだと信じている姿に生き写しの人間になっていきます。信じ込んだことがどんなに間違っっていても、ただそうなる以外に道はないのです。有名な作家のマックスウェル・アルツは言っています。「自分は『失敗するタイプの人間』であると考えている人は、たとえ機会がめぐってきても、しかも本人に誠意と意志が充実していても、あれこれするうちに結局失敗してしまう。」でも幸いなことに、この逆もまた真なりです。自分は「成功するタイプの人間」であると信じている子供は、障害になることや不利な点があっても、成功への道を捜し出します。

親がどのようにしたら、自分の良い姿を信じるように子供を励ましてあげられるでしょうか。子供はあなたから張られるレッテルを大体何でも信じるでしょう。ですから良いレッテルと良い思い、良い感情で、その子に良い影響を及ぼすことができるのです。もしマークが算数の問題に苦労していたら、「これは難しいわね。でもあなたは難しいことを解くのが得意ですもの。あなたが歩き始めるとき、一生懸命だったのを思い出すわ。何度転んでも絶対やめなかったのよ」と言うといいでしょう。両親はこのような機会をたくさん見つけて、良い特性を伸ばしてあげることができます。

また、小さなことで成功する機会を作って、子供を心からほめてあげることも役に立ちます。もしスージーが料理に興味を示したら、簡単にできるサラダやホットケーキの作り方を教えてあげます。そ

して上手にできたとほめてあげれば、スージーは「できる」という気持を感じて、もっと難しいことをしてみようという自信をつけるでしょう。

もしマイケルが絵が好きならば、いろいろな材料を与えて、彼の努力を認めてあげて下さい。ジューンがひとりで服を脱いだとき、ジョージが言われなくてもごみを拾ったとき、パートが宿題を上手に仕上げたとき、ちょっとひとほめてあげて下さい。

悪いことを叱るより、良い行ないを強調することで、子供の力を増し、進歩成長を助けることができます。4歳のデビーが自分で布団を敷く練習をしているとします。20分もシーツで悪戦苦闘して、片方のしわが伸びたと思うと片側にまたしわが寄るといった具合です。そこでもしあなたが「デビー、頑張ったわね。ほらこっち側はこんなにきれいよ」と言って、しわが寄った側のことは何も言わなければ、次の晩は率先して布団を敷き、気持よく練習を続けて上手になっていくでしょう。ところが、「そうねえ、まあ上手ね。でもこのしわを見てごらん下さい。もっと練習しなくちゃ。」と言ったら、砂漠に水が吸い込まれていくよう

に、熱意はさめてしまうでしょう。

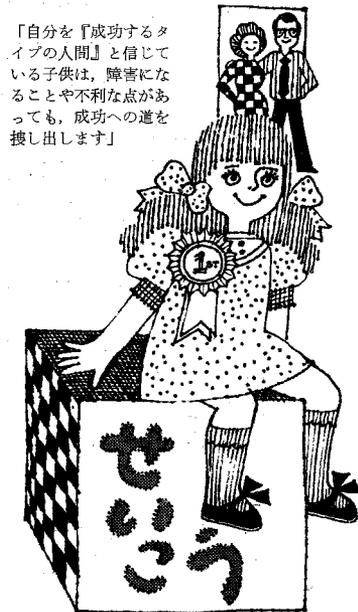
しかし、ほめ言葉の全部が全部役立つわけではありません。頭をなでられ、あなたは本当に天賦したいな子だと言われた途端に、態度が悪くなる子がいるかもしれません。ほめ言葉が効果を上げるには、子供が真剣に努力して成し遂げたことだけをほめなければなりません。申し分のない性格だと言われても、それがお世辞だとわかれればいい気持はしません。これは、大人でも子供でも同じことです。自分の欠点はよく承知しているので、それを知らせようと最低の自分をあからさまにした衝動にかられるかもしれません。

ですから、ジミーが庭掃除をしたら、庭がどんなにきれいになったか、どんなによく働いたかをほめて下さい。ジミーは良い子だ、何と役に立つやさしいかわいい子だ、とは言わないことです。正しいほめ言葉を聞くだけで、ジミーは自分の性格について積極的な良いイメージを持つことができるでしょう。ほめ言葉を裏切らずに頑張らなくてはという重圧感や、いつも良い子なわけではないことを見せるんだ、という気持を感じさせることなく。

もちろん、時には失敗を指摘することも必要でしょう。デビッドが畑仕事を手伝っていて、じゃがいもの種いもを上下さかさまに植えたら、間違いを教えてあげなくてははいけません。しかし、このようにしなくてはだめだだけで、具体的に教えて下さい。その子の性格まであれこれ言うてはいけません。「なんだ、間抜けだな、全部違ってるよ」ではなく、ただ「じゃがいもは芽から伸びていくから、芽のある方を上になくしちゃね」と言うのです。正しく植えたら、よくわかったねとほめて下さい。

両親が子供の行ないを正直に正しくほめたなら、子供は自分について積極的な良いイメージを持ち、それはやがて健康な心を育む礎石となるでしょう。子供が自分について良いイメージを抱くように導いて下さい。それは取りも直さず、心の健康な幸せな人生を築く助けとなるからです。

ハンクス姉妹はスペインから帰国してまだ間もない。夫君の仕事でスペインに渡り、姉妹はM I Aや初等協会に活躍した。二児の母親である彼女は、現在プロボ北ステーク部プロボ第18ワード部に所属している。



アロン と みつばち



キャロリン・グレックナー

絵 ハワード・ポスト

家のわきの日かげで、アロンは足を投げ出して、一生けんめいみつばちの巣箱のわくをみがいていました。古いみつろうをすり落としてわくをなめらかにするのです。みつろうというのは、みつばちの巣を作っているもので、六角形をしたものがたくさんついています。これは働きばちが作り、この中にみつをためておきます。

「アロン！」お父さんがよびながら、お兄さんのジョーとしばふの上を歩いてきました。「お母さんをむかえに、町まで行ってこようと思うんだが。」

アロンはあわててとび起きて言いました。「ほくも行けるの？」

「いや、わくのそうじを終わらせてもらいたいんだよ。今年の巣分れがもうすぐくるだろうし、そうすれば巣箱がいるからね。」

「巣分れのときは、ほくも手伝っていい？」アロンはきました。

「もう少し大きくなってからだな。」お父さんはそう言って、ほほえみました。「はちがいなくなったらこまるからね。」

「わかったよ。」家族にとって、はちがどんなにたいせつなものかを知っていたアロンは、それ以上何も言いませんでした。夏になる前、胴枯れ病のために、お父さんが作ったうもろこしが半分もだめになってしまったので、はちみつを売ったお金で生活しなければならなかったのです。

もう手伝えるのになあ。これまでお父さんとお兄ちゃんが働くのを何度も見てきたし。

お兄ちゃんがいるから……、ほくはいつも子どもに見られて、何もさせてもらえないんだ！アロンはこう思いました。わくをきれいにできるのに、どうしてみつばちの手伝いをさせてくれないのか、アロンにはわかりませんでした。

お父さんとお兄さんが古いトラックに乗って出かけると、アロンはまたわくをこすり始めました。わくがきれいになると、腕にかかえて巣箱がおいてある畑にそれを運びました。

アロンが畑のすみで、からの巣箱にわくを入れていると、みつばちがあちこちからぶんぶんと飛んできました。もうひと山でわくのそうじが終わるぞ！

最後のわくが終わったので、それを畑に運んで行きました。そのとき急にアロンは立ち止まって耳をすましました。みつばちのぶんぶんという音が、いつもよりも大きいような気がしたのです。

「巣分れが始まるのかも知れない。」そうつぶやくと、アロンは巣箱に走って行って、ひとつひとつを調べました。

はじめのはどれもだいじょうぶでした。みつばちは元氣よく静かに、巣箱から出たり入ったりしていました。ところが三列目の終りにきたとき、アロンの思った通りのことが起こりました。みつばちの群れが金色の糖みつのように、巣箱の片側から流れ出たのです。

「巣分れが始まるんだ！」

アロンは手をかざして道路を見おろしました。しかしお父さんが帰ってくる気はいは全然ありません。それにアロンは、みつばちは新しい女王が誕生するといつでも、巣分れしてしまうことを知っていました。

アロンは物置きに走って行って、すぐに巣箱にかぶせるおおいを持ってきました。四角な白いふたをかぶせているアロンのま上を、はちが茶色い雲のようになって飛んでいくのが見えました。

アロンはがっかりして、みつばちが物置きのそばのやなぎの木に向かって行くのをじっと見ていました。みつばちたちはそこで速度を落とし、しばらく空中を回っていました。それからやなぎの枝におちつきました。

みつばちをつかまえる機会はまだある、とアロンは思いました。ただひとつの方法が残されていました。それは、アロンが巣分れしたみつばちを移すことでした。

そこでアロンはみつばち飼いの道具がおいてある物置きに行き、お父さんの仕事着を引っ張り出しました。すそとすそをまくり上げ、足首や手首からはちが入らないように、ひもでしばりました。帽子はアロンには大きすぎるので、ふちが肩までさがっていました。それから急いでネットを首のまわりと、えりの上にかきました。そしてのこぎりをこわきに



かかえると、やなぎの木に向かいました。

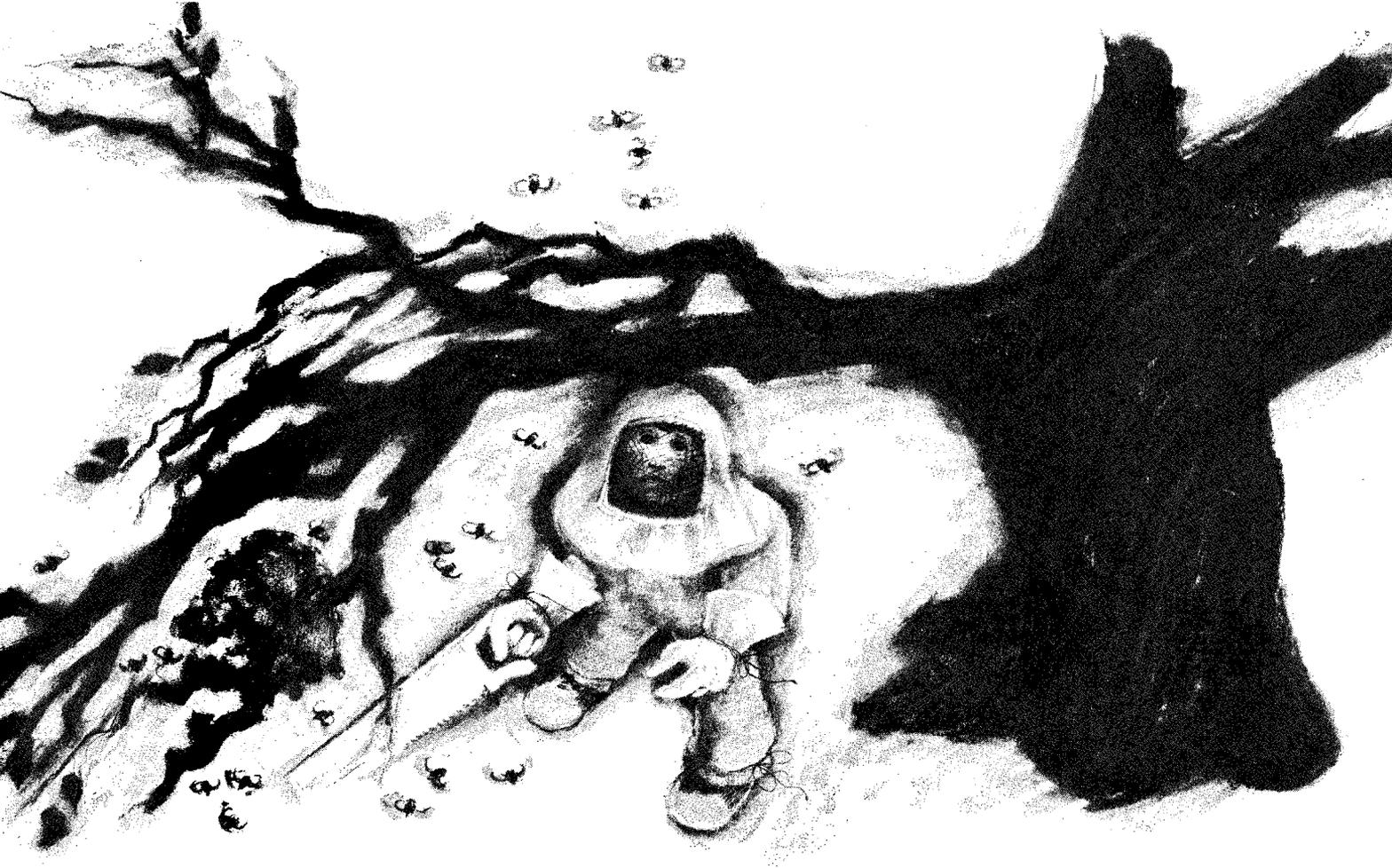
アロンは、急いで木を切り始めました。木を切っている間はちがにげ出さないようにと、そればかりを願っていました。

アロンは切った木がたおれないようにささえながら、巣箱のほうに運びました。

こんな近くで巣分れしたはちを見たのは、これがはじめてでした。巣分れしたはちは、巣を守っているはちほどはささないけれども、働きはちはおどろいたり女王はちからはなれたりするとよくさすことがあるということを知っていました。

歩いているさい中、一ぴきのはちが帽子のネットの中に入り、首のまわりでぶんぶんいい始めました。枝を投げだして帽子をとって、はちをおい出したかったのですが、そんなことをしたら、巣分れのはちがどこかに行ってしまうことを、アロンはわかっていました。

アロンは畑を横切って巣箱の方に歩きながら、首のまわり



でぶんぶんしているはちのことをわすれようとしてしました。すると、もう一びきが首の中に入り、何もおおわれていないところを見つけ出して、ちくりとさしました。

さんざんな目にあいながらもアロンは、それでも歯をくいしばって、巣分れのはちを巣箱の上に静かにもどしました。はちがまた動き出すかもしれないことを知っていたので、アロンははちが巣箱の中の方に入っていくまで、じっと見ていました。

それから、枝をそっと動かして、巣箱にふたをしました。へとへとになったアロンは、物置きに行ってお父さんの仕事着をぬぎました。するとはちにさされたところがひりひりしてきました。ちょうど着がえが終わったとき、声が出たので見上げると、物置きの入口にお父さんとお母さんとお兄さんの3人が立っていました。

「まあ、どうしたの、アロン？」お母さんが聞きました。

「さされちゃったの」アロンは答えました。「ずい分おそかったけど、何かあったの？」

「事故にあった人を助けていたのよ。」

「巣箱から出すのは待ちなさいって、何度も言っていたらう。」お父さんはきつく言いました。

「ぼく、待っていたんだよ。お父さんたちが早く来ないかなって。」アロンは言いました。「だけど、巣分れしちゃったから、帰るのを待っていたらはちがどこかに飛んで行ってしまおうと思って。それでぼくが新しい巣箱に移したんだよ。」

「みんなひとりでやったのかい？ したこともないのに、どうやって？」

「だって、お父さんたちがするのを何度も見てきたもの。ぼくにはできないと思っていたんでしょ。」

お父さんは新しい巣箱を調べ終わると言いました。「よくやったね。もうおまえは立派なみつばち飼いだね。これからは手伝ってもらうことにしよう。」

「ほんと、お父さん。」アロンは大喜びで言いました。「でも、ぼくにちょうどいい仕事着が必要になるね。」

アロンははれあがった首をなでながらにっこりしました。

イエスさまが天にのぼっていかれると、私たちは、よろこびながらエルサレムに帰ってきました。イエスさまは、ふっかつなされたのです。

そのころ、120人ほどのイエスさまの弟子があつまっていました。その中でペテロはいいました。「わたしたちは、キリストをうらぎったユダのかわりに、新しいしとをえらばなければなりません。イエスさまがヨハネからバプテスマをおうけになってから天にのぼられるまで、わたしたちといっしょにいた人の中からひとり、イエスさまのふっかつのあかし人をせんになさなければなりません。」

そこで、そこにあつまっていた人々は、バルサバとよばれたヨセフとマツテヤというふたりの人

をえらびました。そして、みんないっしょに、このふたりのうち、どちらがしとになるのがよいかおしえてください、と神さまにいのりました。

おいのりのあとでマツテヤがしとにえらばれました。

ペンテコステの日がきて、ユダヤ人たちがしゅうかくをいわっているときに、しとたちはあつまって、しゅうかいをひらいていました。するととつぜんはげしい風のような音が天から聞こえて、しゅうかいをしている家いっぱいになりひびきました。そして、したのようなものがほのおのようにわかれてあらわれ、ひとりびとりの上にとどまりました。しとたちはせいれいにみたまされ、いろいろな国のことばではなしはじめました。



この音は町中にひびきわたったので、大ぜいの人が、しとたちがしゅうかいをしている家のまわりにあつまってきました。しとたちは、あつまってきた大ぜいの人々に、イエスさまのみわざや、ふくいんや、イエスさまのふっかつについてはなしました。

そのときのエルサレムには、いろいろな国のいろいろなことばをはなす人々がすんでいました。しかし、しとたちはせいれいの力によってはなしたので、すべての人々が、そのいみをりかいすることができました。そのことばを聞いた人々はあっけにとられていました。そして、人々はつよく心をさされ、「きょうだいたちよ、わたしたちは

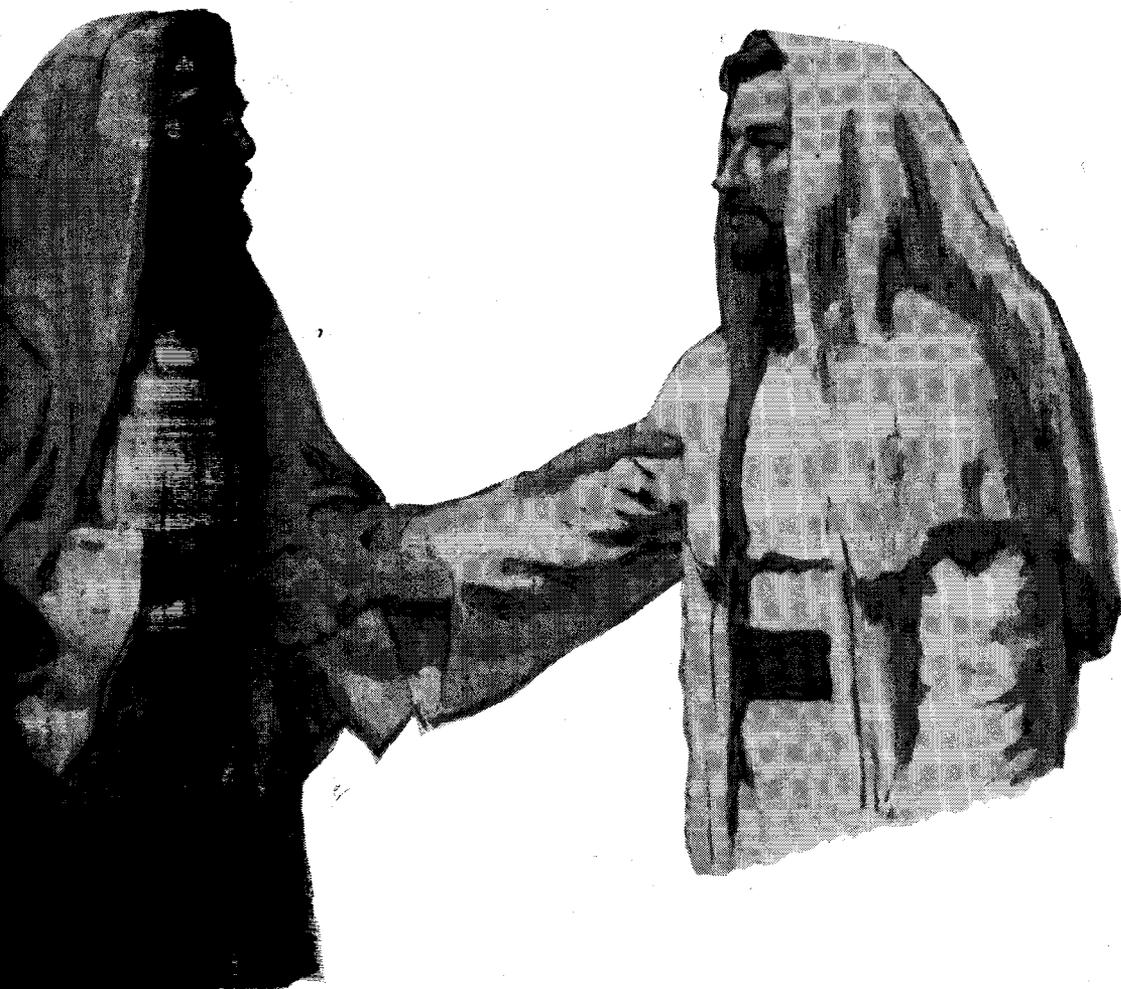
どうしたらよいのでしょうか」としとたちにたずねました。

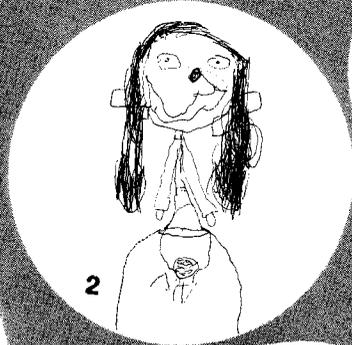
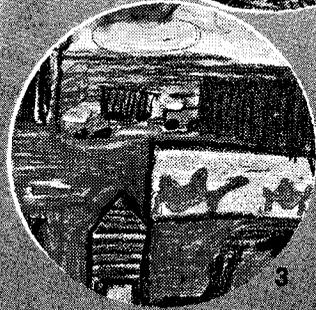
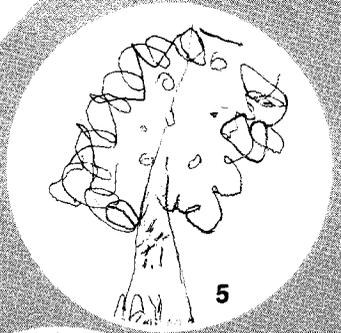
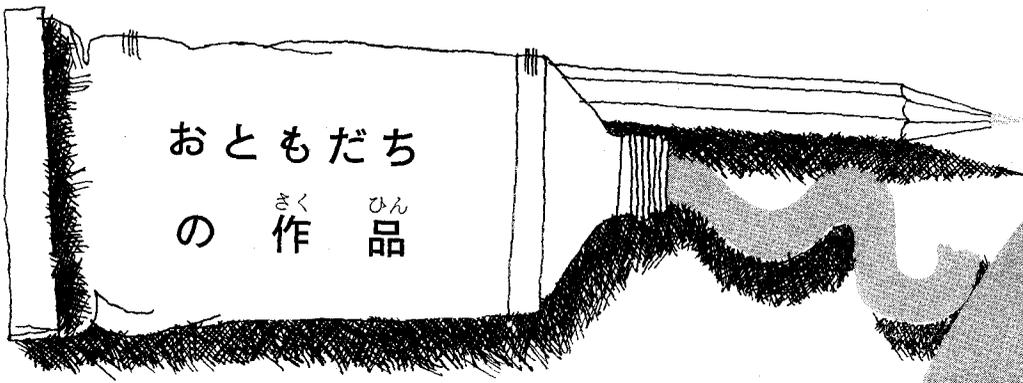
するとペテロはこうこたえました。「くいあらためなさい。そしてあなたがたひとりびとりがつみのゆるしをえるために、イエス・キリストの名によって、バプテスマをうけなさい。そうすればせいれいのたまものをうけるでしょう。このやくそくは、あなたがたとあなたがたの子どもにあたえられています。」

そして、ペテロのことばをうけ入れた人々は、よろこんでバプテスマをうけました。この日に、だいたい3,000人の人がきょうかいにはいりました。

ペンテコステの日

しとぎょうでん 1,2しょうより

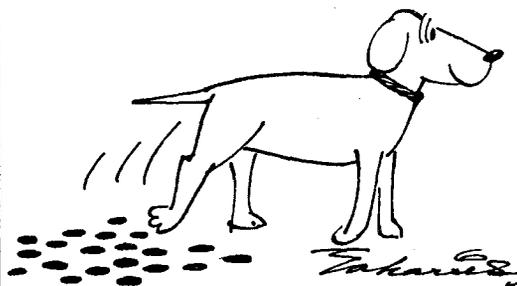
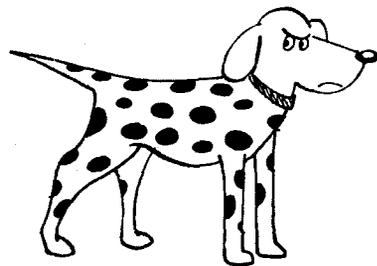






- 1, クリスティーナ・カルドナ・マルチネス
10歳 バルセロナ, スペイン
- 2, マルタ・カルドナ・マルチネス
5歳 バルセロナ, スペイン
- 3, ホセ・ルイス・マルチネス・ヒル
7歳 バルセロナ, スペイン
- 4, ヘスス・クワン・カルドナ・マルチネス
10歳 バルセロナ, スペイン
- 5, ウェイン・イブセン
3歳 コペンハーゲン, デンマーク
- 6, ラファエル・マルチネス・ヒル
9歳 バルセロナ, スペイン
- 7, アドルホ・ガルリガ
8歳 バダロナ, スペイン
- 8, マスエル・ホセ・パチェコ・ラミネス
5歳 バゴ, スペイン
- 9, ヒルベルト・ロセル
9歳 モンガト, スペイン
- 10, フランシス・ハビエル・メサス・ペレス
10歳 バルセロナ, スペイン
- 11, リディア・ロセル
9歳 モンガト, スペイン
- 12, カテリーナ・バルネル
8歳 マドリード, スペイン
- 13, ノニー・レイング
8歳 ポウエル, ワイオミング
- 14, ケリー・A・スコット
10歳 メサ, アリゾナ
- 15, ポール・ベンサム
9歳 ベッツ, イギリス
- 16, ジル・レイング
6歳 ポウエル, ワイオミング
- 17, ガリン・イブセン
11歳 コペンハーゲン, デンマーク
- 18, ロサ・マリー・マルチネス・ヒル
10歳 バルセロナ, スペイン

おもちゃばこ



ことりがすへかえれる
ようにたすけてあげま
しょう。

どのみちが
いいかな？

愛し合い、許し合いなさい

十二使徒評議員会補助

O・レスリー・ストーン

救い主の教えを心に留め、また救い主が世の人々に与えられた数多くの素晴らしい事柄を心に留めておくことにより、あらゆる人々はその霊性が高められる。救い主は、はるか有史以前より生きておられた。救い主は天上の大会議に座を連ね、そこで御父を助けてもろもろの天を形造り、地を創造し、人を造られたのである。

サタンの計画に反対して、人の自由意志を主張されたのは、他ならぬこの救い主であった。救い主は、人に選択という栄えある特権を与えるよう主張されたのである。この特権は、私たちにとって極めて重要な意義を持つものである。

救い主は、時の絶頂の神権時代にこの地上で生活された。約束の地に住まわれたのである。

救い主は努めて人々に教え、また善き業を行なわれた。人々は、世の富を得るためではなく、天の宝を得るために、この救い主に従って行った。

救い主は新しい生活律を定められた。それは、互いに愛し合い、さらには敵までも愛しなさい、というものであった。救い主は私たちに、人を裁かず、人を許し、あらゆる人にもう一度機会を与えなさい、と言われた。

教義と聖約64：8—11の中で、互いに許し合うのは私たちの義務であり、その兄弟を許さない人は罪に値し、さらに大なる罪があると、救い主は言われた。

救い主は、私たちが社会でお互いに仲良く暮らしていくための、不朽の律法を与えて下さった。マタイ7：12で



次のように言われている。

「だから、何事でも人々からしてほしいと望むことは、人々にもそのとおりにせよ。これが律法であり預言者である。」

私たちの中で、この律法に完全に従って生活している人は、ごくまれである。だが、もし人がこの原則に従って生活したら、地上のあらゆる国々で直面している問題は皆解決されるであろうということに、疑いをさしはさむ人はだれもいないと思う。確かに、私たちがこの原則に従って生活したならば、私たちに対して罪を犯す人々を愛し、許すことは、いとも易しいことになるであろう。

マタイ22：36—39に、ひとつの出来事が書かれている。当時の律法学者が幾人かキリストのもとへ来て、次のように尋ねた。

『先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか。』イエスは言われた、『心をつくし、精神をつ

くし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ。」これがいちばん大切な、第一のいましめである。第二もこれと同様である。「自分を愛するよう
にあなたの隣り人を愛せよ。』」

まず私たちが心に留めておかなければならないことは、私たちの一番近くにいる隣り人とは私たち自身の家族である、ということである。次の隣り人とは、隣りの家に住んでいる人々のことであり、それから同じ町の人々、同じ市の人々、同じ地方の人々、同じ国の人々、そして、全世界の人々にまで及ぶのである。いかなる形であれ、私たちが交わり、影響を与え合っている人々は、皆、私たちの隣り人なのである。

人は、自分を愛するようにその隣り人を愛さなかったら、日の栄の国に行くことができるだろうか。イエスが第二の戒めを与えられたとき、イエスは第二も第一と同様であると言われ、ふたつの戒めを繰り返されて、次のように言われたのである。「これらの二つのいましめに、律法全体と預言者とは、かかっている。」

救い主は、このふたつの戒めを極めて大切なものとされた。そのために、他のあらゆる律法と戒めとがこのふたつにかかっているのである。

もうひとつの質問をしてみよう。人は、第二の戒めに従った生活を送らずして、一番大切な、第一の戒めに従った生活ができるだろうか。言い換えれば、人はその隣り人を愛さずして、心をつくして神を愛することができるだろうか、ということである。

使徒ヨハネは次のように言った。

『神を愛している』と言いながら兄弟を憎む者は、偽り者である。現に見ている兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することはできない。神を愛する者は兄弟をも愛すべきである。この戒めを、わたしたちは神から授かっている。(Iヨハネ4:20, 21)

また、ニューファイ第三書11:29, 3には、次のような言葉がある。

「まことに、まことに汝らに告ぐ、争いを好む心ある者はわれに属く者にあらずして悪魔に属く者なり。悪魔は争いを生む親にして、人々の心を煽動して互いに怒り争わしむる者なり。

見よ、人々の心を煽動して互いに怒り争わしむるときはわが教義にあらず。わが教義はかくの如き怒りと争いとを止めよと言うものなり。」

これらの言葉と他のもろもろのことから、私たちがはっきりと認識しなければならないことは、主は私たちが互いに愛し合い、許し合うよう望んでおられる、ということである。私たちの高慢をおさえ、同胞との不一致を解消することは、私たちの義務である。今、第3ニューファイから引用したように、争いと議論とは悪魔から出たものであって、私たちの天父からは決して認められることではない。自分を愛するように、その隣り人を愛することによって、私たちの生活には大いなる喜びと幸福がもたらされるのである。

キリストは、許しを实践された。罪を犯した女の話覚えていたであろう。律法によれば、その女は石で打ち殺されるはずであった。人々はその女をイエスのもとへ連れて行き、イエスがどのようにその女を裁くか、見ることにした。ヨハネ8:6, 7には、次のように書かれている。

「彼らがそう言ったのは、イエスをためして、訴える口実を得るためであった。しかし、イエスは身をかがめて、指で地面に何か書いておられた。彼らが問い続けるので、イエスは身を起して彼らに言われた、『あなたがたの

中で罪のない者が、まずこの女に石を投げつけるがよい。』

そこにいた人々のうち、だれひとりとしてその女に石を投げつける資格のある人はおらず、群衆は皆、散って行った。そこで、イエスは女の方を振り返って、言われた。「わたしもあなたを罰しない。お帰りなさい。今後はもう罪を犯さないように。」(ヨハネ8:11) 救い主が、この女の行為を承認したのではないことは確かである。だが、救い主は、ここで許しの模範を示され、その女の裁きを天の御父に委ねられたのである。

救い主は、御自分の命を取ろうとした人々をも許された。救い主は、苦痛の絶頂にあったときでさえ、次のように言われたのである。「父よ、彼らをおゆるしてください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。」(ルカ23:34)

救い主がこの地上にもたらされた福音、すなわち、この時満ちたる神権時代に回復された福音は、私たちに美しい救いの計画を携えて来てくれた。私たちは、自分がかつて前世に住み、そこで勇敢であったことを知っている。主は私たちが地上に来ることを認められた。私たちが地上に来た目的は、**肉体を得、知識を得、私たちの才能と性格をのぼし、悪に打ち勝つことを学び、私たちがずっと主に真実で忠実であることができるかどうかを見るためである。**さらに、勤勉であり、かつ戒めに従順であって、主の御前に戻って共に住む資格があるかどうかを見るためである。

私たちの問題の多くは、姿を変えた祝福である。そのような問題が与えられた目的は、私たちがこの地上でするはずの経験をし、それによって、永遠の存在における次の段階で、様々な問題に遭遇した際にそれを解くための準備をすることなのである。

今日、私は、これまで私に与えられてきた数限りない祝福に思いを向け、モルモン経の中のベンジャミン王の言

葉を思い出している。王は、主がこれまで王の民に注いでこられた祝福の数々を列挙した後、民に向かって次のように言った。「ごらん、神がお前たちに要求なさるのは、お前たちが神の命令に従うことだけである。」(モーサヤ2:22)

まことに、主が私たちに要求されるのは、ただ、主の戒めを守りなさいということだけである。こう言うと、比較的容易に聞こえるかも知れない。だが、私たちは皆、それが容易でないことを知っているし、容易であるはずもない。多く与えられる者は、多く求められるのである。**主は、主と共に住む人々に、弱点や不完全さを克服する能力を持つよう望んでおられる。**主はまた、自己否定と自己訓練とを要求しておられる。

私たちの中で、時折、主の戒めのうち幾つかは、この世で幸福を得るための障害になっている、と感じている人々がいる。だが、そうではない。私たちは心の真底から知っている。つまり私たちが戒めに忠実である限り、夜が昼に続いて来るように、確かに私たちは、忠実な人々に約束されている祝福を刈り取ることができるのである。時には、それを成し遂げる方法が私たちにわからないことがあるかも知れない。だが、成し遂げることができるということは確かである。主は次のように言われた。

「汝らわが言うところを行わば、主なるわれこれに対して責任あり。されど、汝らわが言うところを行わずば汝ら何ら約束を受けず。」(教義と聖約82:10)

裁きの日に、「あなたは自分の責任を果たしませんでした」と言われることを望んでいる人が一体何人いるだろうか。「あなたの生活は、戒めを守るといふ点においては、あまりにもひどい模範であったために、あなたは主のしもべとしてふさわしくなかった」と言われることを望んでいる人がいるだろうか。

『あなたがたの中で

罪のない者が、

まずこの女に石を

投げつけるがよい。』

マタイ 5 : 16において、主は極めて大切な教えを説かれた。

「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」

主の戒めを守らずにいると、罰を受けるだけではなく、実際に、この地上で受けられるはずの数多くの祝福さえ失ってしまいます。私たちが皆求めている永遠の祝福をも失なうことは言うまでもないことである。コリント前書 2 : 9には、次のように書かれている。

「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかったことを、神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた。」

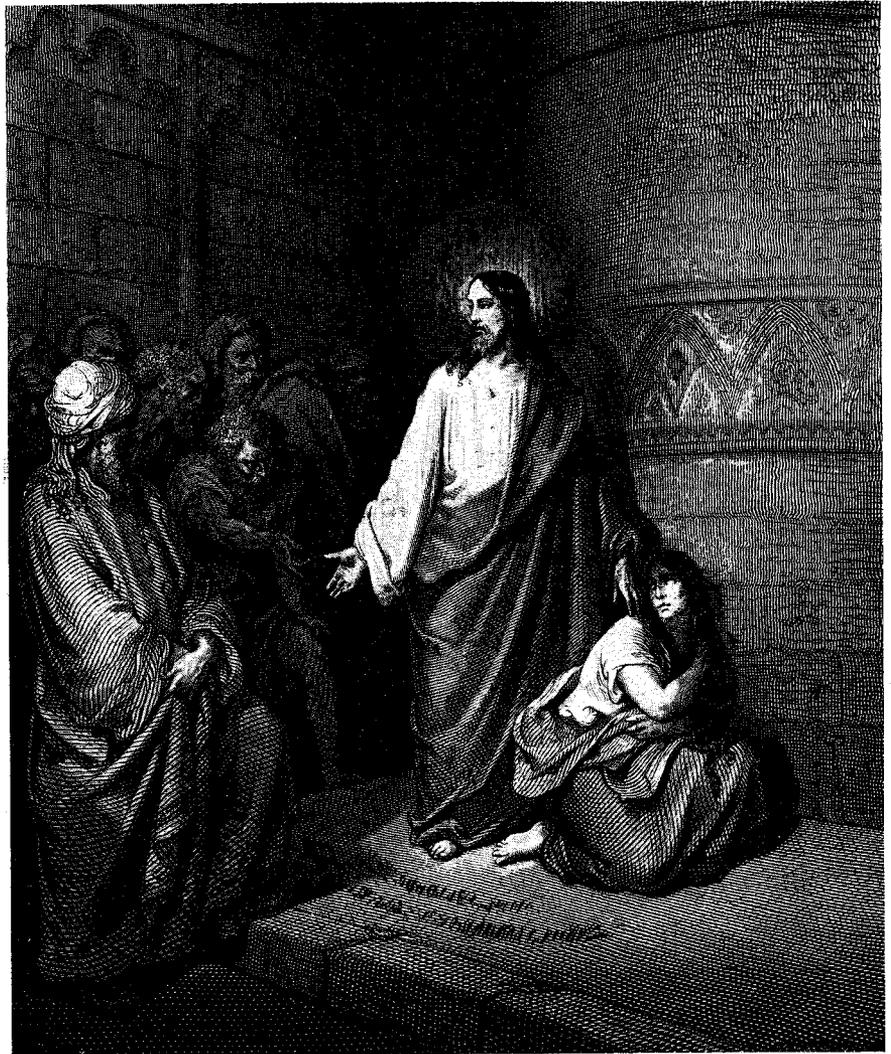
この偉大な約束について考えていただきたい。そして、決定的とも言える素晴らしい約束がすべての人に与えられた。

「もし汝わが誠命を守り終りまで恐ぶならば永遠の生命を得ん。これ神のあらゆる賜の中最大なるものなり。」
(教義と聖約 14 : 7)

故ヒーパー・J・グラント大管長は、どのようにして終りまで恐ぶのかということを次のように話された。

「私たちは、天の御父のみこころを今日果たそうではないか。そのようにすれば、明日の務めのために備えをすることができ、こうして、永遠のために備えをすることができるのである。」

キリストは、御自分の福音が、業と奉仕の福音であることを繰り返し強調されてきた。祝福を受けるためには、ただ聞くだけの者ではなく、御言を行なう人にならなければならない。マタイ 7 : 21には、次のように書かれてい



る。「わたしにむかって『主よ、主よ』と言う者が、みな天国にはいるのではなく、ただ、天にいますわが父の御旨を行う者だけが、はいるのである。」

これは、つまり、もし私たちが救いを、昇栄を、そして永遠の生命を得たいと望むならば、福音の原則に従った生活をおくらなければならない、ということである。私たちは、あらゆる人を愛し、許さなければならない。

私は今日、ここで証を述べたいと思う。私はイエス・キリストの真の福音が、この神権時代に回復されたことを知っている。ジョセフ・スミスは、その回復にあたって、主の御手にある器として働いた。ジョセフ・スミスは、

過去も現在も、神の予言者である。私たちが、今日も、予言者であるハロルド・B・リー大管長によって導かれていることを証する。私たちが皆、リー大管長と大管長の同僚たちに、私たちの愛と支持の気持を示すことができるよう、また、いつも彼らが健康と体力と靈感に恵まれ、その重責を果たすことができるよう、心からお祈り申し上げる。また、私たちが、戒めを守り、福音の原則に従った生活をする勇氣と決断力を持つことができるよう、イエス・キリストの御名により祈る次第である。アーメン。

従 順

第一副管長

N・エルドン・タナー

私は神権者の群れの前に立つとき、常に私をへりくだらせ、鼓舞激励してくれるものがあるのを感じている。それは、この神権者たちが主の御名によって行ない、世の光となり、またその影響力を駆使してサタンの策略を打ち破るために、選ばれ、聖任され、任命され、そして権能を与えられた人々であるということを知っているからである。

私の孫のひとりが、最近、次のようなことを言った。その子があるものを手に入れるためには、どんなことをしなければいけないのかについて話してやっていたときのこと、「うん、それはまだまだ遠い先のことだね」と言うのである。私たちは神権の義務について、特に若い人々と話をするとき、また残念ながら年輩の人々と話をするときでも、彼らは自分が決して死なないとも考えているらしく、そのような問題がまだまだ遠い先のことだと考えているように思えるのである。そのような人々には、今日、自分の望む方法で生活していても、明日になれば一変して、今度は主の望む方法で生活することができると考えている節がある。

私は今日、そういう青年たちに、私がこれから申し上げることを心して聞いていただきたいと願っている。あなたたちのために思っている話だからである。あなたたちは神権を保持している。あなたたちはこの末日日に生を受け、地上で神権を持つ唯一の教会において神権を持つ者となるべく、すでに選ばれていたのである。あなたたちに



は、神の御名によって行なう機会が与えられている。あなたたちは、神権の召しを全力を尽くして遂行し、この地上において神の王国を打ち建てるための手足となるという誓約を主と交わしたのである。あなたたちには次の約束が与えられている。

「およそ忠実にしてわが今語れる二つの神権を得、而してその天よりの召しを全力を尽くして遂行する者たちは、『みたま』により聖められてその肉体再新さる。

これらの者はモーセの息子たちとなり、アロンの息子たちとなり、アブラハムの子孫となり、また教会員にして王国の民となり神の選民となる。

……この故にわが父のもてるすべては彼に与えらるべし。」(教義と聖約84:33, 34, 38)

次に、主がすべての神権者に与えら

れた戒めに注目していただきたい。

「われ今汝らに一つの誠命を与えて汝ら自らを警めしむ。すなわち汝ら永遠の生命なる言に勉めて心を留めよ。

そは、汝ら神の口より出るすべての言により生くべければなり。」(教義と聖約84:43, 44)

世の中の諸悪と対抗するために、今日ほどあなたたちに力強さと影響力が求められている時代はない。ニーファイ第二書には、この諸悪についての予言が書かれている。ニーファイは、今日の状態について、悪魔の業について言及しつつ、次のように語っている。

「ごらん、その時に悪魔はある人々の心に入って荒々しい行いをさせ、またこの人たちに善い事を怒らせる。

またほかの人々をなだめ、この人たちをすかして肉欲をほしのままにさせるから、その人々は『シオンの中では万事よるしい…』と言う。このように悪魔はこの人々をだまし、心を配って地獄へつれて行くのである。」(Ⅱニーファイ28:20, 21)

兄弟たちよ、このようなことはほんでもないことだと思っているかもしれない。だが私たちが死んだとき、主が私たちに課せられたことを喜んで果たしたのでなければ、私たちは決して喜んで迎え入れられることはないのである。

もし私たちが自分の召され、任命された職の務めを全うしたいと願うならば、まず私たちの神権を尊び、その召しを全力を尽くして遂行しなければならない。そしてリー大管長が戒められ

たように、神を愛し、神の戒めを守りなさい。数々の戒めを守るためには、自己鍛練と律法に対する従順さが必要となってくる。従順は、天の第一の律法である。私は特に、この神の律法に対する従順についてお話ししたいと思います。これら神の律法は、この地上における私たちの幸福や福利に影響を及ぼすだけでなく、私たちが永遠の生命に至るために必要欠くべからざるものだからである。

まず第一に強調したいことは、神が人に与えられた最大の賜のひとつが、人の自由意志であるということである。あなたたちは自分の生涯を、また自分の将来を自分で選ぶことができる。だが、主は次のように言われている。「もしあなたがたがわたしを愛するならば、わたしのいましめを守るべきである。」(ヨハネ14:15) これは、年少であろうと年輩であろうと変わりはない。

ここで一編の短い詩を読みたいと思う。

「汝知らずや、人みな自由なるを
人生を選び、己が行く末を選ぶ
とわなる真理与えられたれば、
神、人を天に強いたまわじ

知恵と愛と光もて
説き、勧め、正しく導き、恵みたもう
はかり知れざる善とやさしさ
しかれども人に強いたまわじ

自由と理性ありて、はじめて人となる
これらなければ、人は何者たりや
野にある獣と何ら変わらざ
獣のごとく、天地を思うや。」

(英文讚美歌90番)

私たちには数々の律法が与えられているが、それをどう適用するかは私たちの選択にゆだねられている。とは言っても、私たちは自分の選択の結果には責任をとらなければならない。あらゆる神の律法は、私たちのために、私

たちの福利と利益を考えて、与えられている。従順であることにより、私たちは祝福を受けるのである。もし不従順であったならば、時にはそれから起こる結果が遅くとも、必ず苦汁をなめることになるのである。

自己鍛練こそ、私たちの成功の基である。人には理性が与えられており、この理性によって、考え、熟慮し、理解し、さらには自分のしたいことを決め、またそれが犠牲を払い、鍛練をするに値するものかどうかを決めるのである。また、教会のことを言えば、人がその交わる人々の嘲笑や圧力に耐えられるかどうかを決めるのも、その人の理性の役割である。あなたたちはすでに召されて、神権を与えられている。あなたたちには福音がある。あなたたちは世の模範なのである。良い模範であっていただきたい。

私たちの成功は、私たち自身の決心、決断、訓練、そして人から信頼される度合に応じて決まるものである。しかしながら、主の次の御言葉も常に心に留めておこう。

「すなわち、われら何にても神より祝福を受くる時は、この祝福の基く律法によりて然るなり。」(教義と聖約130:21)

また、次のようにも言われた。

「汝らわが言うところを行わば、主なるわれこれに対して責任あり。されど、汝らわが言うところを行わずば汝ら何ら約束を受けず。」(教義と聖約82:10)

自然の法則は不動のものであり、常に正しく作用する。無知からであろうと、故意であろうと、もし真っ赤に焼けたストーブに手を触れたら、必ずやけどをすることになっている。また、高圧電線に触れても同じ結果を被ることになる。また、もし重力にいどんで高層ビルか高いがけの上から飛び降りてみせると言って飛び降りたら、空中にいる間だけは「すべては善し」と言うことができるであろう。

太陽や月や星のことを、また太陽や

月の満ち欠けのことを考えてみよう。ある日食から次の日食までどれほどの長い年月がたつていようとも、科学者たちは日食の正確な時刻と、それが一番良く見える地点とを詳細に言い当てることができる。もし私たちが、毎朝太陽が昇るかどうか疑ってみなければならぬとすれば、それは何とひどいことであろうか。また、もし日の出が数時間遅れたとしても、何と住みにくくなることであろうか。私たちは凍え死んでしまうであろうし、この地上に生き残ることのできる生命は、もしあったとしても、ごく微々たる数であろう。これも皆、太陽の「今日は気分が乗らないから、昇るのはやめにしよう」という一言で起こり得ることなのである。

スカイラブ計画やアポロ計画に携わっていた人々は、種々の法則がその計画を阻害しているなどとは決して考えなかった。むしろ、その計画全体の詳細を決定するための手段として利用したのである。その計画の推進者たちも

あなたたちが百分の一を計算するときと同じ方法で、主も、私たちに与える祝福の量を計算しておられるとしたらどうだろうか。

またその計画の協力者たちもこぞって数年間もかけて、自然の法則が支配しているものを研究し、その法則に従って様々な生活を試みたのである。

興味深いことに、私たちが動物を訓練するときは、その動物が、何でも私たちの命令通りにするようにしつけようとする。私たちは、何時間も、何日も、何週間も、何カ月もかけて、猟犬や牧羊犬や馬を訓練するのである。サーカスにいる他の動物と同様である。また、サーカスでアクロバットを演ずる人々も、演技に必要なことを準

備するにあたって、何カ月も何年も費やすのである。彼らはあらゆる法則を活用し、また舞台での演技を可能にするために、それら諸法則に従順に従ったはずである。

これは、人生のあらゆる面にあてはまる。私たちは喜んでそのために時間を費やし、動物たちが間違わずに芸をすれば、必ずほうびを与える。だが間違えば、罰を与える。そして、もし動物たちが教え込まれた通りにせず、もう訓練はできないとなると、私たちはその動物を見放してしまう。「それならば、時間をかけて、子供たちが義しいことを行なうよう訓練することは、一層大切なことではないだろうか。」また、神の子供である私たちも義しいことを行なうよう自らを訓練し、さらにあらゆることに従順で、神の戒めを守りつつ、あるべき所で、なすべき時に、なすべきことをしているように自ら訓練することも、同様に大切なのである。このように行なった暁には、私たちは永遠の生命を得ることができる。これは紛れもない事実である。

神権者たちよ、私たちの指針として聖典が与えられ、神の御言葉が与えられているということは、また私たちを導くために神の予言者がいるということは、何という幸運であり、祝福であろうか。私たちには定員会があり、指導者がいる。その指導者たちが、私たちに正しい原則を教え、励ましてくれるのである。

私たちが予言者の声に聞き従い、自らを治め、救い主イエス・キリストの教えに従うことは、いかに大切なことであろうか。イエス・キリストこそ、私たちのために御自分の命を捧げられ、私たちの指針として福音を与えて下さった御方なのである。私たちは、予言者ジョセフ・スミスの語った次の言葉に、絶えず心を留めておくべきである。

「神が要求されるものは皆正しい。その要求が何であれ、また、事が起こるまではその理由がわからなくとも、然りである。」

人はこれまで何世紀にもわたって、ある律法がなぜ与えられたのかその理由を知らずに、また理解せずに過ごしてきた。だが、神を信ずる信仰によって、賢明な人はその律法を受け入れ、戒めを守ってきたのである。

アダムは、なぜいけにえを捧げるのかと尋ねられたとき、次のように答えた。「われその故を知らず、ただ主の誠命に従うのみ。」(モーセ5:6)

アダムにはこれで充分であった。彼は相変わらず戒めを守った。自分がノアの立場にあると想像していただきたい。このとき、主はノアに、行って箱舟を造るよう命じられた。雨も降っていなければ、何ら心配するものもなかったが、とにかくノアは行って箱舟を造るよう命じられたのである。そこでノアは箱舟を造り始め、さらに数々の指示に従った。だが一方、その指示に従わない人々も大勢いた。彼らは指示を信ぜず、そのようなことはまだまだ遠い先のことであり、恐らく起こらないであろうと考えたのである。そしてその結果は、あなたたちが知る通りである。

リーハイはエルサレムを立ち去るようという指示を受けたが、御存知のように、家族の中から反対がわき起こった。リーハイの行動を正気のさたではないと疑う人もいたが、リーハイは主の御言葉を受け入れて、それに従順に従った。こうして主は、大海を航海するための船を建造するよう、リーハイに指示を与えられたのである。

なぜ主が私たちに全身を水に沈めるバプテスマを受けるよう言われたのか、だれか説明できる人がいるだろうか。私たちは、ただその教えに従順に従っているだけである。按手礼はどうだろうか。「はい、私はこの教会の会員になりたいと思います」と言うだけで事足りりとしめないのだろうか。

知恵の言葉が与えられたとき、それに疑義をさしはさむ人が多くいたし、また、主の御言葉として受け入れない人も多くいた。知恵の言葉は戒めでは

時間をかけて、子供たちが義しいことを行なうよう訓練することは、一層大切なことではないだろうか。リーハイの家族を見れば、彼らはエルサレムを立ち去るようという指示を受けたが、御存知のように、家族の中から反対がわき起こった。リーハイの行動を正気のさたではないと疑う人もいた。

ないと言う人もいた。だが、主が私たちに受け入れるよう望んでおられるものは、私にとって、それだけで充分戒めになり得るのである。今ここに、ニコチンの飲用に関する記事がある。この記事は知恵の言葉が与えられた後、140年たってから書かれたものである。この記事の初めには、次のような文が見られる。

「ニコチンは、肺、心臓、脳に悪影響を与えている。ニコチンによる死者は、腸チフス、結核、黄熱病などの伝染病による死者よりもはるかに多い。」

さらにその記事の終りでは、次のように言っている。「16世紀初頭以来の西ヨーロッパ全土における腸チフスによる死者の数よりも、合衆国一国における1年間の、タバコが原因となって死んだ者の方が多い。」

主は意図するところがあってすべてを語られるのだろうか。教会員は、戒めが与えられた理由を知っていようが知るまいが、その戒めを守るべきであろうか。兄弟たちよ、私たちは神権者なのである。主の教会、すなわちこの地上における主の王国の会員は皆、戒めを守るべきである。私はこの教会が主の教会であり、神の予言者を通じて主により導かれていることを証する。

その記事ではさらに、ニコチンやタバコを飲用していると、往々にしてヘロイン、麻薬、アルコールなどを飲用するようになる、と述べている。だがこういう裏付けや情報があるにもかかわらず、何千何万という人々がいまだ



にタバコを吸い続けている。これは、神の予言者の声に聞き従い、予言者を通じて与えられた戒めを守ることがいかに大切であるかということを示す、良い例である。主は、主の予言者について次のように言われた。

「この故に汝ら教会員は、彼が上より受くるままに汝らに与うる誠命と彼の言とを皆心にとめてよく聞き、わが前に全く聖き道を履むべきなり。

そは彼の言は、汝ら全き忍耐と信仰とを以て、あたかもわが口より聞くが如くにこれを受け入るべきなればなり。

これらのことを為さば、地獄の門も汝らに打勝たざるべし。而して、誠に主なる神は汝らの前より暗闇の力を追い払い、汝らの為と神の御名の栄光のためにもろもろの天をも震い動かしめん。」(教義と聖約21：4-6)

兄弟たちよ、この約束で充分ではないだろうか。

安息日に関しても、確かに、教会員と神権者たちは、主に聞き従うはずである。主は、私たちに安息日を聖く守るよう戒められている。

「汝なおさら充分に世の汚れに染まざる様、祈りの家に行きてわが聖日に汝の聖式を捧ぐべし。

そは誠にこの聖日は、汝命ぜられて働きを休み、いと高き者に礼拝を捧ぐべき日なればなり。」(教義と聖約59：9, 10)

私たちのために命を捧げて下さった主に仕えるため、7日のうち1日を捧げることくらいできるはずである。また、主の教えに従うこともできるはずである。主は、私たちが主に礼拝を捧げ、主の犠牲に対し感謝の念を表わすよう教えられた。推測するに、この戒めは、神権を持つ人によって非常にしばしば、無視され、破られているようである。

兄弟たちよ、今こそ数々の分野において、自らを吟味し、主が望んでおられることをなすべき時なのである。ひとりの男性が、つい最近、私にこのよう

なことを言った。「この教会は私たちにいろいろなことを要求しすぎます。」

私は言った。「兄弟、この教会はあなたに何も要求していません。ただ、あなたにより良い生き方を提供しているだけです。」するとその男性は「でも、それがひどくむずかしいんです」と言った。「では、本当にそうなのかどうか、考えてみましょう。どこかでタバコでも買って来て、ふたりでゆっくり吸いましょうか。それとも、これからふたりで銀行を襲って、どんなことになるかみてみましょうか。そして今晚、仲間と一緒に一杯飲みにも行きましょう。」「タナー副管長、ばかなことを言わないで下さい。」「わかりました。あなたがばかなことを言わないのなら、私も言いません。」そして、私は最後に「あなたが守らなくともよいと考えている戒めがあったら、またあなたの子供には守らないよう教えたいと思っている戒めがあったら、ひとつでいいですからあげて下さい」と言った。その男性は、ひとつとしてあげることができなかったのである。

什分の一についてお話ししよう。私たちは、主が私たちに与えて下さったものの什分の一を喜んで支払うことができるはずである。その上その什分の一に相当する財産も、火事や台風やその他様々な原因で、一晩のうちになくなってしまいうこともあるということがわかれば、なおさらである。

私がエドモントン支部を管理していたときのこと、ひとりの男性が私のところへ来て、こう言った。「今年は什分の一を完全に納めることができせん。家の造築やら改築やらをしなければなりませんでしたので。」私はその男性に、主が私たちにあふれるばかりの祝福を注いで下さると約束して下さっていることを話した。だが、その男性は「とにかくそれでも私は納めることができせん」と言うだけであった。ところが新年早々、その男性はしばらく入院することになった。そして非常に高い治療費を請求されたが、そ

れを払ったのである。私はここで、その男性が完全な什分の一を納めなかったために入院したのと言うつもりはない。私が言いたいことは、その男性が什分の一を完全に納める気持さえあったら納めることができたという証拠が歴然としているということである。

あなたたちが什分の一を計算するときと同じ方法で、主も、私たちに与える祝福の量を計算しておられるとしたらどうだろうか。あなたたちは、非常な困難に遭うこともあろう。肉体的にも精神的にも病に倒れることもあろう。家族のために悩むこともあろう。そのようなときに、主から「これだけしか什分の一を納めていないから、この人はどれだけ祝福を差し引いたらいいだろうか。これにぴったり見合うだけの祝福しか与えないでおこう」と言われてもよいと言うのだろうか。

兄弟たちよ、神の戒めに従順になるのではないか。私たちが忠実であることを実証し、世の模範に、そして世の光になろうではないか。私たちのもつ神権を、そして私たちの召しの重さを充分に認識していただきたい。私たちに、神権を保持する偉大な特権と、世に福音をもたらす責任とが与えられている。私たちは、その業を、教えによっても、また行動によってもなすことができる。だが行動によって行なうならば、一層効果的である。私たちは神の戒めに従って生活し、あらゆることに従順でありさえすれば、この世においては喜びを得、来たるべき世では永遠の生命を受けることができるのである。また、世の人々に良い影響を与え、この地上における神の王国の建設の助けをすることもできるのである。

私たちが、今現に所属するイエス・キリスト教会の会員として、今まで述べてきたことをなすことができるよう、また、主の代弁者として選ばれた神の予言者に従って行くことができるようイエス・キリストの御名によって、へりくだって祈るものである。アーメン。

贖い主イエス・キリスト

第二副管長

マリオン・G・ロムニー

教会員であるなしを問わず、世界のあらゆる所におられる愛する兄弟姉妹の皆様。

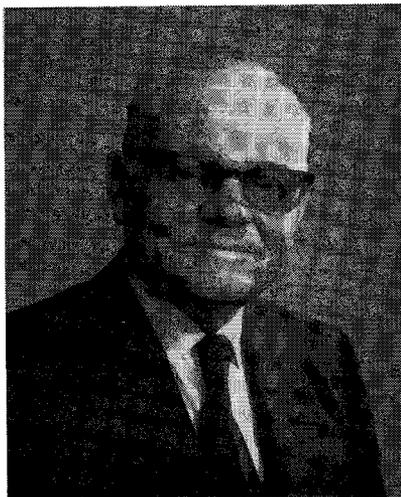
末日聖徒イエス・キリスト教会の信仰箇条第一条には、次のように書かれている。「われらは、永遠の父なる神と、その御子イエス・キリストと聖霊とを信ず。」

先回の総大会において、私は、「永遠の父なる神」について述べた。それで、今日は私たちの贖い主である「その御子イエス・キリスト」について、お話ししたいと考えている。これは、非常に神聖なテーマであるために、あなたたち皆が、私と共に天父の助けを求めて祈って下さるよう願っている。私たちは天父の助けがあってはじめて、その独り子、すなわち私の救い主についての理解を深め、認識を深めることができるのである。

まず、時の経過から言うと、私たちは、イエスに関する最も初期の情報を聖典から得ることができる。聖典には神の霊の子供たちが皆参加した、あの前世の大会議について書かれている。その大会議において、御父は、人の永遠の進歩のための計画を提案された。これに従って、イエスは自ら志願して、人が救いと昇栄を得るのに必要な、贖罪をする役目を引き受けられたのである。

アダムから現在の予言者、ハロルド・B・リー大管長に至るまで、歴代の予言者たちは皆、神の霊の長子であるイエス・キリストが私たちの贖い主として選ばれたことを、また現に、贖い主であることを証している。

イエスに先立ってこの世に生を受けた予言者たちは、イエスが贖い主として選ばれていたことを証し、またイエ



スが地上に来て、その使命を果たされるであろうと証した。

はじめに、アダムが神の命令に従順に従って犠牲を捧げていたときのこと、「……主の天使一人アダムに現われて言いけるは、汝何故に主に犠牲を捧ぐるやと。アダム彼に言いけるは、われその故を知らず、ただ主の誠命に従うのみ。

ここに天使語りて言いけるは、この犠牲を捧ぐることは、御父の生みたまう……ただ独りの御子が犠牲となりたまうことのひながたなり。」(モーセ5：6，7)

この時からキリストが肉身を持ってこの世に降臨されるまで、神の定めた永遠進歩の計画を理解していた人々は皆、同じ様な犠牲を捧げた。御父が、人々にこれを要求されたのは、常に人々に、キリストの降臨について思い起こさせ、また、贖い主としての役割を果たすはずの贖罪について思い起こさせるためであった。

主はさらにアダムに次のように言われた。

「……もし汝われに心を向け、わが声を聴きて信じ、且つすべて汝の罪を悔い改め、恩恵と真理に充ちたるわが生みし独子の名により、すなわちそれによりて後に人の子らの救われる天下に与えらるる唯一の名、すなわちイエス・キリストの名によりて水に入りてバプテスマを受くるならば、汝聖霊の賜を受くべし。……」(モーセ6：52)

「この故に、汝の為すすべてを御子の御名によりて為せ。また汝悔い改めて今よりいつまでも御子の御名によりて神を呼ぶべし。

アダムとイヴとは……息子娘らにすべての事を知らしめたり。」(モーセ5：8，12)

アダムの時から時の絶頂に至るまで、世の人々は、神が人類の救いのために定められた神聖な計画、すなわち、イエス・キリストの福音を絶えず教えられていた。エノク、ノア、メルケゼデク、アブラハム、モーセ、イザヤ、エレミヤなどの予言者たちも、このことを教えていた。

キリストの誕生の直前までの2,000年の間、アメリカ大陸ではふたつの偉大な文明が開花していた。その人々にもやはりキリストの使命が知らされていた。モルモン経には、神の御力によって「大塔」からアメリカへ導かれて来たある移民団の指導者のひとりのことが書かれている。その指導者に、

「……主は現われて……言いたもうた。『見よ、われはわが国を贖うために創世の前より備えられたる者なり。われはイエス・キリストなり。……わが名を信ずる一切の者はわれによりて永遠に光を授け……

見よ、今汝が見るこの体はわが霊体なり。……われは今わが霊のまま汝に

現れると同じ形の肉体を具えてわが民にもまた現われん』と。」(イテル3:13, 14, 16)

モルモン経の記録によれば、それからおよそ2,200年後、キリストの生まれる前の晩、ひとりのアメリカの予言者に「主の御声が聞こえ」てきた。その御声は次のように言っていた。

「頭をあげよ。元気を出せ。予言の成就する時は近づきたり。……われはわが聖き予言者らの口を借りて言い伝えたるすべての事を必ず成就せしむることを世の人々に証明せんために明日世の中に来らん。」(Ⅲニーファイ1:13)

私たちは皆、当然のここのように、主の御使いがベツレヘムの野で、主の降臨を告げ知らせたことを知っている。「きょうダビデの町に、あなたがたのために救主がお生れになった。このかたこそ主なるキリストである。」

(ルカ2:11)

御父も御子も共に、イエスは私たちの贖い主であるという確信に満ちた証を繰り返して述べられる。キリストのパプテスマのとき、御父は次のように言われた。「あなたはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。」(ルカ3:22)そして、その後、変貌の山においても、御父の声があった。「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。これに聞け。」

(マタイ17:5)

新約聖書には、キリスト御自身がその身分と使命を証されたことがたびたび記録されている。御父と御子が共に証されたものの中で、最も印象的な宣言のひとつは、アメリカ大陸にいたニーファイの民に対して述べられたものである。それは、キリストがエルサレムにおいて復活後の御業をされたあと、ニーファイの民を訪ねられたときのことであった。御父は、ニーファイの民に対し、よみがえられたイエスを指して次のように語られた。

「わが喜ぶ愛子を見よ。われはこれに由りてすでにわが名の栄光を示し

ぬ。わが愛子に聞け。」(Ⅲニーファイ11:7)

その後、イエス御自身、すなわちよみがえられたイエスが天から降ってきて、「群衆の中に立ちだもうた。……時に……群衆に話しかけて仰せになった。

『見よ、われはイエス・キリストなり。予言者らがこの世に来ると証をしたるその者なり。』(Ⅲニーファイ11:8—10)

「われがこの世に来れるは、世の人に贖いと救いとを与え、また世の人を罪より救うためなり。

この故に、悔い改めて幼児のごとくわれに来る者は、われごとくこれを受け容るべし。……故に、世界の隅々に至る若者たちよ。悔改めをなし、われに来りて救いを受けよ。」(Ⅲニーファイ9:21, 22)

時間が限られているが、贖い主としてのキリストの責任と使命について、私自身の証を述べたいと思う。

私自身、私がこれまで引用してきた証は皆真実であることを証することができる。イエス・キリストの贖罪によって、人は皆復活して不死不滅になることができ、また、イエス・キリストの福音に対する従順の度合いに応じて永遠の生命を得ることができる、と証申し上げる。

私は、イエス・キリストが父なる神の霊の長子であり、肉において神の独り子であることを知っている。また、聖典が教えるように、この地球が創造される以前の前世において、イエスは御父の計画を支持し、人に死すべき状態、死、復活、永遠の生命をもたらす助けをされた。さらに、御父から権能を受けて、この地球の創造主となられた。また旧約聖書におけるエホバでもある。「まことにイエス・キリストは過去においても現世においてもエホバであり、アダムの神、ノアの神であり、アブラハム、イサク、ヤコブの神であり、イスラエルの神であり、世々の予言者に語らしめたもうている神であり、

万国の民の神であり、また今に『王の王』『主の主』として地上に君臨したもうはずの神である。」(ジェームズ・E・タルメージ著「基督イエス」)

イエスはベツレヘムのみどり児としてこの世に降臨し、御父から生を与えられ、マリヤから生まれた。キリストの教えられた福音によってのみ、人はその創造された意義を全うすることができるのである。「肉身におけるキリストの完全無欠な生涯」と「全人類の罪のために自ら犠牲になられた、その死」は、キリストが死から勝利を収められたことと相まって、あらゆる人が復活し、不死不滅となり、さらにキリストにより定められた条件次第では永遠の生命にあずかることも可能にしたのである。

私は、これらのことが皆真実であることを証し、さらに1820年の春、この同じイエス・キリストが、御父と共にニューヨーク州パルマイラの近くの森で、ジョセフ・スミス(二代目)の前に姿を現わされたことも証する。これは人類の歴史上、最も大いなる神の現われのひとつであった。予言者はこのことについて次のように記している。

「……そしてその光が私の上に留った時、私は筆紙に尽し難い輝きと栄光とを有したもう二人の御方が私の真上の空中に立ちたもうのを見た。そしてその中のお一人が私に言葉をかけて私の名を呼びたまい、他のお一人を指して『こはわが愛子なり、彼に聞け』と仰せられた。」(ジョセフ・スミス2:17)

イエスは御自分が言われたように、「世の生命にして世の光明」(教義と聖約10:70)である。また「……イエス・キリストとは、御父より賜わりたる御名にして、この名のほかにはよりて以て人類の救われ得る名一つもなし。」(教義と聖約18:23)キリストの『みたま』は世に来るあらゆる人々に光を与え…その声を聴く全世界のあらゆる人々を照すなり。

この『みたま』の声を聴くすべての

人は神に来る。すなわち、御父の許に
来るなり。」(教義と聖約84:46-47)

私は現在、主の予言者であるハロルド・B・リー大管長によって管理されているこの末日聖徒イエス・キリスト教会が、キリストの教会であることを証する。この教会が、キリストの指示

のもとに設立され、キリストの権能を持ち、キリストからその福音を教え、救いの儀式を執り行なうよう委任されていることを証する。これは皆、人が祝福や喜びや栄光を受けるにふさわしくなるためなのである。私たちの主であり、贖い主であるイエス・キリスト

は、これらの祝福や喜びや栄光を、正に手を伸ばせば届かんばかりのところ
に備えて下さったのである。私はこれらのことが真実であることを、贖い主イエス・キリストの聖なる御名により、証申し上げる。アーメン。

末日聖徒イエス・キリスト教会

第143半期総大会 土曜夜の神権会における説教

根本的な義務—神権

十二使徒評議員会補助

ロバート・L・シンプソン

今宵、私たちは、恐らくこの世の歴史上、最も大きな神権者たちの集まりに参加している。主の望みに従って、この会場に集まれたあなたたちひとりびとりに、心からの祝福をおくりたいと思う。あなたたちがこの会場にいるということは、とりも直さず、あなたたちの信仰の証左であり、神の王国の活発な一員でありたいという願いを表わすものなのである。

私たちが世の人々に告げることは、神が生きておられ、もろもろの天はすでに開かれ、神権の権能は地上に回復され、生ける予言者が私たちの頭にいる、ということである。

私たちは、予言者ジョセフ・スミス
の貴重な考え方や言葉が記録されている、高価なる真珠の中のあの章を、聖典と見なしている。その中でジョセフは、1820年の春に起きた驚くべき出来事の詳細を語っている。ジョセフの言葉を借りれば、この記録の目的は「…起ったありのままの事実を……あらゆる事件の真相を知ろうとする者に知らせることである。」(ジョセフ・スミス2:1) ジョセフはさらに、「……私は事件の真相を真実に且つ正しく……述べよう」(ジョセフ・スミス2:



2)と言っている。

家族の状況を少々説明し、その地方に起きた宗教上の騒動について書いた後、予言者はヤコブ書第1章第5節の聖句に強く心を打たれた、と書いている。

「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせず、惜しみなくすべての人に与える神に、願い求めるがよい。そうすれば、与えられるであろう。」予言者はさらに言葉が続けている。

「どの聖句にもまさって、この時ほどこの言葉が私の心に真に力強く迫っ

て来たことはない。それは私の心の底と言う底を大きな力で貫き通すような気がした。……

……私はついに『神に願う』と決心をして、もし神が智慧の欠けた者に智慧を与え、しかも惜むことなく咎めることもないならば、ひとつ神に願ってみようとした。

そこで神に願うと言うこの決心に従い、これを実行しようとして私は森の中へ人を避けて入り込んだ。それは千八百二十年の早春、一点の雲もない美しい朝であった。このような企をしようとしたのは、私の生涯ではじめてであった。というのは私があれほど苦しんでいる真最中でも、口に出して神に祈ろうとしたことはまだこれまでになかったからである。」(ジョセフ・スミス2:12-14)

これが14歳の少年の言葉と思えるだろうか。さらに話は続く。

「私は、前以て行こうと計画をして置いた場所へ人目を避けて入り込んでから、あたりを見廻して人気のないのを見ずすとひざまずいて自分の心の願いを神に祈り始めたが、私が祈り始めるや否や、直ちに私は何とも知れぬ力によって捉えられ、ついに私は全く

抵抗力を失った。またその力は私の舌さえしびれる程の驚くべき力を振ったので私は物言うこともできなかった。そしてあたりはだんだん暗くなり、一時はあたかも私はこのまま急に死んでしまうかのように思われた。

しかし、私は自分を捉えたこの敵の力から何とぞ逃れしめたまえと、全力を振りしぼって神を呼び求めたが、私が今にも絶望に打ち沈んでわが身を破滅に任せようとしたその瞬間、それは考えただけの滅亡というようなものではなく、目に身えぬ世界から来た何ともわからぬ生き者で、全くこれまで私がどんな者に逢っても覚えたことのない程の驚くべき強い力を具えた者の力に打ち負けて、わが身を見捨てようとしたその瞬間、この非常な驚きの瞬間である、私は自分の真上に太陽にも増して輝やく一つの光の柱を見た。そしてその光の柱は次第に下りてきて、光はついに私の上にもふり注いだ。

その光の柱が現われるや否や、私はわが身を縛った敵から救い出された事に気が付いた。そしてその光が私の上に留った時、私は筆紙に尽し難い輝きと栄光とを有ちたもう二人の御方が私の真上の空中に立ちたもうのを見た。そしてその中のお一人が私に言葉をかけて私の名を呼びたまい、他のお一人を指して『これはわが愛子なり、彼に聞け』と仰せられた。(ジョセフ・スミス 2 : 15-17)

兄弟たちよ、私たちは今、共に、救い主イエス・キリストの復活以来、世界で最も意味深い事件を振り返ってみた。この最初の見神は、この教会の基となっている。そして、私は、この教会の会員が皆、この最初の見神に対する証と信仰の強さに応じて、各々の義務を果たしているものと確信している。あなたはどれほどこの話を深く信じているだろうか。ジョセフ・スミスの証を一度聞いた人で、良識のある人なら決して中立の立場をとることはしないはずである。

ジョセフ・スミスは、ごく普通の家

系に育った、しごく平凡な少年であった。だが、この時から、ジョセフは類まれな予言者となったのである。最初の示現から9年の間、ジョセフは神権を受ける特権にあずかるために準備を重ねた。あなたたちが知っての通り、ジョセフ・スミスとオリバー・カウドリの熱烈な祈りに答えて、サスケハナ河岸に姿を現わしたのは、バプテスマのヨハネであった。だが、そのような歴史的な出来事にしては、何と簡潔な言葉であったことだろうか。

『汝ら、われと同じ業に働く僕らよ。救世主の御名によりて、われ汝らにアロンの神権を授く。これは天使の導きと恵み、悔改めの福音、罪を赦すために水に沈むるバプテスマなどの鍵を握る神権にして、まことにレビの子孫が主の御前に再び義しきに適いて捧物を捧ぐる時まで、この世より決して再び取り去らるることなし』と。

そしてこの使者は、このアロン神権は按手によって聖霊の賜を与える権能を有ってはいないが、かような神権は後から私たちに授けられると言い、今行なってバプテスマを受けよと命じ、そして私が先にオリバー・カウドリにバプテスマを施し、その後で彼が私にバプテスマを施すべし、と指図をしたもうた。

よって、私たちは行ってバプテスマを受けた。私は第一にオリバーにバプテスマを施し、後で彼は私にバプテスマを施した。それから私は両手を彼の頭上に按いて彼にアロン神権を授け、次に彼が両手を私の頭上に按いて私に同じくアロン神権を授けた。それは、かように天の使者に命ぜられたからである。(ジョセフ・スミス 2 : 69-71)

この出来事の数週間後、ペテロ、ヤコブ、ヨハネが現われて、ジョセフとオリバーにメルケゼデク神権を授け、使徒職に聖任した。以来、その神権の権能は今日に至るまで、連続として受け継がれている。神の家が秩序の家であり、200年前のあの偉大な指導者たちが特権を与えられてこの地上に真の

神権の権能を回復したということを知って、本当に心強い限りではないだろうか。一連の出来事に関する論理の一貫性からも、まだジョセフらに姿を現わした方々がどのような御方であったかからも、その歴史的な事件の全貌が、神聖な性質のものであるという確証を得ることができるのである。

教会が組織されたのは、その翌年の1830年のことであった。ここに遂に、真理が打ち建てられ、絶えざる啓示が確固たるものとなったのである。

それから6年ほど後、カートランド神殿において、ある安息日の午後、主御自身が栄光のうちに、ジョセフとオリバーに御姿を現わされた。その同じ日、モーセ、エライヤス、エライジャも現われ、その古代の予言者たちは各々、福音の重要な鍵を回復した。救い主の現われを記録した予言者ジョセフ・スミスの見事な描写に、もう一度耳を傾けてみよう。

「われらの心より覆い取り去られて覚りの眼開かれたり。

われらは、われらに面して教壇の胸欄に立ちたもう主を見たり。而して、主の脚下にはこはくの如き色したる純金の床ありき。

その眼は燃ゆる炎の如く、頭髮白きこと清き雪の如く、その顔は日の輝きにも勝りて光り輝き、その声は洪水の激する音の如し。誠にエホバの御声……。(教義と聖約110 : 1-3)

それから救い主は、ひとつの御言葉を述べられた。私たちは皆、折に触れてこの部分を読むべきである。それは教義と聖約の第110章に書かれている。

今宵、この神権会に参加している私たちは皆、神権の義務を引き受けた者である。すでに契約が交わされたのであり、契約を果たさずに言い逃れをすることはできない。それは、「主が命じたもうことには、人がそれを為しとげるために前以てある方法が備えてあり、それでなくては、主は何の命も人に下したまわぬ」(1ネーファイ 3 : 7) からである。このような約束

が与えられているために、私たちが義務を履行しない言い逃れをすることはできないのである。

神権を持つ兄弟たちよ、今まで、数々の神聖な現われについて振り返って考えてきた。その中には、父なる神、その御子イエス・キリスト、バプテスマのヨハネ、ペテロ、ヤコブ、ヨハネ、そしてその他古代の予言者たちがいる。このようなことを考えるとき、あなたたちは、その偉大な御業に携わっていて、心が躍るのを覚えないだろうか。これらの出来事が実際に起きたことを知ったとき、もし私がもう一度、若い執事に戻ることができるとしたら、聖餐のパスを一週間の仕事のうちで最も大切な仕事のひとつであると考えて行なうであろう。私の一挙手一投足が、また私の身だしなみが、救い主から私に委ねられた地位の尊厳と誉に、見事に調和するように努めるであろう。

また、断食献金を集めることは、豊かで、新しい意味を与えてくれることであろう。私は、一軒一軒訪問するたびに、自分が監督の代理であることを心に思い起こし、また貧しい人々が私の努力の結果によってもっと豊かに祝福され、ヤコブが言うような「清く汚れない信心」を保つことができるよう、自分によく言い聞かせるであろう。(ヤコブ1:27参照)

もし私が若い教師か祭司にもう一度なれるとしたら、私は、自分がホーム・ティーチングの同僚のプラスになるように努力することであろう。自分が訪問する会員たちと固い友情の絆を作ることができるよう、一層努力することであろう。救い主がされたように、人々の霊を高めるように努めるであろう。聖餐会における責任が、豊かで霊的な経験になるようにし、決して軽々しい気持で責任を果たさないであろう。神聖な儀式に参加するときは、これ以上はできないというほどの敬意と努力を払って参加するのでなければ、ワード部の人々に悪影響を及ぼし、キリストの真理のみたまを裏切ること

なるのである。

もし私が、あなたたちのひとりのように、25歳以上の若い成人で、まだ結婚していないとしたら、だれか、もう完全な者となった女性ではなく、完全になる可能性を持った女性を捜し始めることであろう。これは別に統計上の記録ではなく、私の確信にしか過ぎないのだが、私は、1世紀にひとりだけ完全な女性が出現すると考えている。そして、私はそのような女性をすでに見つけ出した。彼女は私の伴侶となっている。

もし私が父親になったばかりだとすれば、私は親切と忍耐と偽らざる愛とを実践するであろう。また、一番最初に何をなすべきか、絶えず心に留め、自分のとっている方向が正しく、かつ終局的には永遠の生命に至ることができるよう、いつも確かめておくであろう。

もし私が長老見込み会員であったなら、私は教会の奉仕活動に参加し、それと同時に、自分の福音の知識を増すことができるよう毎日の勉強を始め、自分の家族が永遠に自分に結び固められるよう努めることであろう。

もし私が活発なメルケゼデク神権者か、高等評議員か、ステーキ部長会の一員か、監督会の一員であったなら、またとりわけ家に子供たちがいるなら、永遠について可能な限りのものを知り、その上で、昔の賢明な勧告を心に留めておくことであろう。すなわち、人が一生を費やして全世界をもうけたとて、自分の家族を失ったとしたら、益にならないしもべのひとりに数えられるであろう、という勧告である。

兄弟たちよ、4つの大切なことをあなたたちに深く考えていただきたいと思う。まず第一は、「こはわが愛子なり、彼に聞け」という永遠の父なる神の御言葉である。これは2,000年前の言葉ではない。私たちの時代に与えられた言葉である。

次は、バプテスマのヨハネが権威をもって語った次の言葉である。「汝ら

われと同じ業に働く僕らよ。救世主の御名によりて、われ汝らにアロンの神権を授く。……」(教義と聖約13)これも私たちの時代のことである。

第3は、救い主の御言葉である。「……わが汝らに遣わして、汝らを聖職に按手任命し……確認せしめたるかのペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人……。」(教義と聖約27:12)これも私たちの時代に起こった出来事である。

そして第4は、カートランドにおける予言者ジョセフの記録である。「われは、われらに面して教壇の胸欄に立ちたもう主を見たり。而して、主の脚下にはこはくの如き色したる純金の床ありき。」(教義と聖約110:2)

同じ業に働く神権者たちよ、本当にこれらの言葉は、人が言っただけの言葉とは全く異なっている。私たちは注目すべき時代に生きている。主は今日も語りかけておられる。あなたたちも私も、そのおとずれを受け入れたのである。私たちの根本的な義務は、神権の責任を果たすことにある。私たちはその責任を、あたかも人の手によるクラブ活動か、単なる友愛組織のものであるかのように、軽々しく考えることはできないのである。

私は全身全霊をもって、私たちには多くのことが委ねられており、その業がみな私たちにかかっていることを証する。主にとって不可能なことはない。リー大管長はこのことについて、今朝の福祉活動の集会における偉大な説教の中で、極めて明瞭に話された。私たちが信仰と決意をひとつにするとき、必ず主の御業を成し遂げることができるのである。願わくば、この義務の念が心の中で炎と燃えるよう。また、それが決して燃えつきることのないよう。そして、受ける機会に絶えず心を躍らせ、慎重に、謙虚に、かつ細心の備えをなして、前進して行くことができるよう、また私たちのなすべきことをすることができるよう。主イエス・キリストの御名により祈るものである。アーメン。

「最も小さい者のひとり」

バックキー・スニード

ラリー・K・ラングロイズ著

カーター姉妹の心は落ちつかなかった。今朝は何もかもうまくいかなかった。家では何もかも悪い方向に動いているように思えた。彼女は祈り会に遅れてしまった。レッスンのことも気持ちが落ち着かないひとつの理由であった。テキストは14、5歳の生徒に本当のキリストの愛をよく理解させることを目的としたすばらしいものであった。しかし、勉強し、祈り、睡眠もとらずに準備したのに、うまくいかないのではないかという気がしてならなかった。

彼女はクラスの騒々しさの問題よりも、むしろ生徒たちがレッスンを退屈に感じないかと、それが心配だった。彼女はどうしても落ち着かなかった。今までにも彼女は、生徒たちの中に、そのような自分の心の内を瞬間的に見抜いたかのような目があるのを何度か見てきていた。あの目が、今日も私を見すえるだろう。

聖餐の讃美歌の間、彼女は彼女のクラスの生徒たちに目をやった。ふたりの少女がひそひそ話をしていた他は、皆讃美歌を歌っていた。

と、突然、彼女の胸には不安が雲のように拡がった。日曜学校のクラスのことがこんなにも、またこのように長い間彼女を悩ましたことはなかった。彼女は歌うのをやめて、深い溜息をついた。緊張は少しとけたが、彼女を悩ませる不安な気持は去らなかった。

彼女は讃美歌に目を落とし、歌詞に神経を集中させようと努めた。

「ああ」と彼女は心に思った。「私の祈りをお聞きください。私たちに愛を教えてください。どうか本当のキリストの愛を教えてください。父よ、今日のレッスンがよくできるようにお助けください。」

おそらく緊張しすぎているのだろう。バックキーがトレイを椅子の端にぶつけて、ひっくり返してしまったのである。



聖餐の聖句朗読とパンの祝福の間、彼女は救い主とその犠牲について考えようと努めた。すると彼女の心は穏やかになり、礼拝の気持ちに満たされた。

間もなく執事たちがバスのために自分の位置についた。彼女はの中にバックキー・スニードがいるのに気づいた。彼は先週アロン神権に聖任されるよう支持を受け、今日初めて聖餐のパスをするのだった。カーター姉妹の夫であるフィルはバックキーの聖任をどれほど誇りにしたことだろう。彼はバックキーがバプテスマを受ける前からスニード家族のホーム・ティーチャーをしていた。スニード家族は不活発で、フィルの忍耐と努力が実を結んだときには、バックキーはもう10歳になっていた。

カーター姉妹はやさしい静かな笑みを浮かべた。スニード兄弟がフィルにバックキーの確認の儀式を執り行なってくれるように頼んできたときのフィルの感動した様を思い浮かべたからである。そのバックキーがもう12歳で執事なのだ。歳月とはこんなにも早くたつものなのだろうか。



彼は他の少年たちより小さいように見えた。彼は座席の列を手から手へとトレイが運ばれてくるのを待っていた。彼の顔は緊張して、こわばっているように見えた。彼はトレイを受け取り、手早く後ろの列へまわした。日曜学校の会長会で働いているフィルは、今朝は子供日曜学校を訪問していた。彼女は、彼がバックキーの最初の割当てを見る機会を逃したことを残念がるだろうと考えた。彼はもうスニード家族のホーム・ティーチャーではなかったが、まだスニード家族とは親しく、特にバックキーとは仲良しだった。

とそのときだった。おそらく緊張しすぎているのだろう。バックキーがトレイを椅子の端にぶつけてひっくり返してしまったのである。カーター姉妹は息をのんだ。近くにすわっていた少女がくすくす笑い出した。バックキーはぱっと赤くなり「だれか助けて、お願い」というように嘆願するような、おどおどした眼で礼拝堂の中を見回した。彼女は彼が泣き出すのではないかと思った。しかし、彼はぎゅと眼をつぶり、気持ちを抑え、かがみこんでこぼれたパンを拾い、それを聖餐のテーブルへ持って行って、別のトレイを運んできた。彼女はほっと息をつき、心が軽くなるのを感じた。そして彼が手際よくその場をとりつくろったことに誇りを感じた。

バックキーはその後、何の失敗もせずに割当てを終えた。カーター姉妹は、バックキーが聖餐のパスを終えた後、椅子にがっくりと腰をおろすのを眼にしなかったなら、そのことを忘れてしまっていただろう。彼はすっかり意気消沈して、全く元気をなくしてすわりこんでしまった。

彼女はそれを見て昔の苦い経験を思い出した。それはあたかも今起こったかのように、ありありと脳裏によみがえってきた。彼女が初めて大人日曜学校で話を割当てられたときのことだった。彼女の両親は彼女の準備と練習を手伝ってくれたので、彼女はもうすっかり話せる気持ちになっていた。しかし、聴衆を前にすると、彼女はあがってしまって準備した言葉をみんな忘れてしまった。彼女は聴衆の視線を浴びながら、きれぎれに思い出した言葉を話し出すと恥かしさでいっぱいになった。彼女は最後まで話し終えずに席にもどってしまった。彼女の頭の中では「もう教会には来れないわ、もう一生教会には来れないわ」という言葉が駆けめぐっていた。

ふとバックキーに目をやると、彼女には彼がそれと同じ苦しみを味わっているのがわかった。もう何年も前、当時の日曜学校の会長は彼女の肩に腕をまわし、何かささやいて勇気づけてくれたものだった。彼女は、その言葉は覚えていなかった。しかし、その言葉がやさしく親切で、肩にまわした腕が暖かく、やさしくて、苦痛をやわらげてくれたことだけははっきりと覚えていた。

オルガンが鳴った。人々は列を作って、礼拝堂から出始めた。後に残った執事たちも次々に自分たちの教室へと出て行った。しかし、バックキーは椅子に腰をおろしたままだった。

「だれもバックキーを助けてあげようとしぬのかしら。」
彼女は思った。「彼がどんな気持ちでいるのか、だれも知らな

いのかしら。」彼女は礼拝堂の中を見回した。「それを知っているのは私だけだわ。彼を助けられるのは私だけだわ。でもどうしたら……」

カーター姉妹はレッスンのことなどすっかり忘れてしまい、ずっと立ち上がると礼拝堂の前の方へ歩いて行った。彼女は何と言おうかと考えた。しかし、何の言葉も思いつかなかった。彼女はバッキーのすぐ隣りに腰をおろした。

「どう、バッキー」彼女は言った。

少年は彼女を見ると、こくと会釈して、また床に眼を落とした。

「もう執事ね。おめでとう。」

彼はしばらく黙ってすわっていたが、やがてまるで後悔しているように弱々しく「ありがとう」と言った。

気まずい沈黙が続いた。カーター姉妹は先週のフィルの意気揚々とした顔が目につく。先週の聖餐会で立ち上がって聖任の支持を受けたときのバッキーと、今のバッキーでは、ああ、何と違っていることだろう。

彼女は椅子の後ろにまわるとバッキーの肩に手を置き、こう言った。「バッキー、私、見ていたのよ。あなたのしたことは立派だったわ。それが言いたかったのよ。」

彼は言葉を失ったように、はっと彼女を見上げた。「そうですとも。」彼女は続けた。「私だったらどうしたらよいかわからなかったでしょう。でもあなたはさっさと手際よく処理したわ。本当に立派だったわねえ。あなたはもう執事だから、神権によって靈感を受ける資格があるのね。私、そう思いますよ。」

少年の顔からは暗い陰は去り、ぱっと光がさすように笑みが浮かんだ。

「ああ」と彼は前に落ちていた髪をかきあげながら言った。「そうですね。その他の方法なんてありませんでしたよね。パンを拾って、トレイをとりかえる以外には。」

「そうですよ。本当にあれ以外の方法なんて考えられませんよ。私、あのとき、あなたが泣き出すんじゃないかと思いましたよ。」

バッキーは、はにかんだように笑った。

「私、あなたが執事としての最初の割当てを立派に果たしたのを見てうれしいのよ。」

「ぼく最初、トレイをおっことしちゃったとき、執事になんかならなきゃよかったって思った。でも、やっぱり執事はいいや、とても楽しいもの。」

少年はすっと立ち上がると「もう行かなくちゃ」と言って彼女の前をすりぬけ、教室へと走って行った。

「そうだわ」彼女はレッスンのことを思い出した。「ああ、レッスンがあったんだわ。ああ、すべてうまく行ってくれるように！」

あたりを見回すと、彼女のクラスの生徒のうち最後のグループが礼拝堂を出るところだった。彼女は走って行って彼らに追いついた。もし生徒が教室で余り長く待たされるようであったなら、レッスンは始める前からだいなしになってしまうことを彼女は知っていた。彼女は足を早めた。レッスンの概略が彼女の胸をよ切った。と、ひとつの概念が彼女を打った。

「そう、これこそ答えだわ。これこそこのレッスンに必要なものだわ。この若い生徒たちは、いつか屈辱感というものを経験を話そう。そうすれば、よきサマリヤ人の話を彼らにもっとよく理解させることができるだろう。大切なのは大きな犠牲を捧げる用意ができていてはなくて、私たちのまわりの人に心からの思いやりを持っていることなのだもの。彼らはきっと毎日奉仕する機会があるということを知ろう。これこそ私たちが毎日の生活の中で福音を実践する方法なのだわ。これこそ福音のすべてなのだわ。これを話せば、あの結びの聖句の意味をもっとよく理解させられる。」

彼女はその聖句を一字一句思い出そうと努めた。「……いつ、わたしたちは、あなたが空腹であるのを見て食物をめぐみ、かわいているのを見て飲ませましたか。いつあなたが旅人であるのを見て宿を貸し、裸なのを見て着せましたか。また、いつあなたが病気をし、獄にいるのを見て、あなたの所に参りましたか。すると、主は答えて言うであろう。『あなたがたによく言うておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。』」（マタイ25：37-40）

教室のドアは最後の生徒が入って行って、彼女の前で、ぱたんと閉まった。彼女はドアを開けながら、胸の中で祈った。「お父さま、私の祈りに応えてくださって感謝します。」教室へ入っていく彼女の顔にはほほえみが浮かんでいた。

ラングロイズ兄弟はロスアンゼルス・イーストステーク部アルハンブラワード部で、アロン神権MIA会長として働いている。

「バッキー、私、見ていたのよ。あなたのしたことは立派だったわ。それが言いたかったのよ」とカーター姉妹は言った。



伝道資金できて



平田 栄 蔵

日本東伝道部
専任宣教師

ある日、いつものように教会で働いていますと、ひとりの宣教師が来て、「少しの間、助けて下さいませんか」と声をかけられました。彼について行くと、もうひとりの宣教師と求道者が部屋に向かい合って座っていました。ふたりの宣教師はもちろん外人です。彼らは求道者の質問の意味がわからなくて困っていたのです。質問を理解できなければ、答えることはできず、求道者は納得できません。そして疑問を残したまま帰って行くことになってしまいます。このとき、会員と宣教師の間に協力が必要であり、また特に日本人の宣教師がもっと多く必要なことを強く感じました。そして福音が真実であることを知っているのなら、また、より福音にそった生活をしたいと望んでいるのなら、私の人生のひとつの仕事として、将来宣教師になろうと決心したのです。

そのようなことがあってから、伝道の準備をやり始めました。教会の責任は私にとってたくさん経験と知識を与えてくれました。やがて夜間大学に入学した関係で、今まで集っていた第5ワード部から横浜ワード部に移ることになりました。学校、教会、仕事、伝道の準備と忙しい日が続きましたが、充実し祝福された毎日でした。教会では日曜学校（8～10歳のクラス）の教師として働き、若い友だちを知ることができました。若い彼らが福音にそって生活しようとしている様子を見るときに、家庭が福音を実践する最良の場であることがわかりました。その当時は仕事として、10歳前後の少年少女が学ぶ書籍類のセールスをやっておりましたので、毎日多くの家庭を訪れていました。そしてこれらの人々が福音を知り、子供たちがそれに従って成長できるならばどんなに素晴らしいかと思っておりました。しかし、福音を伝える者がいなくては誰も知ることができません。ロマ書10章14節に「しかし、信じたことのない者を、どうして呼び求めることができるか。聞いたことのない者を、どうして信じることができるか。宣べ伝える者がいなくては、どうして聞くことができるか」とあります。

さて、学校に進んだことや、その他で出費が続き、伝道資金が減ってきたので、もっと収入の多い仕事を求め、トラックの運転手として働くようになりました。また、私が伝道の

準備をしているからとのことで、横浜の兄弟たちから部屋を提供していただくなど多くの援助を受けたことに心から感謝しております。

次の春までに伝道に出られる見通しがついたのですが、翌春になって大きな問題にぶつかってしまいました。東京ステークスの方針によって、伝道資金個人負担のチャレンジが以前の倍額になったのです。これには困ってしまいました。どうすることもできません。伝道をあきらめるか、しばらく時期を待つか迷ったのですが、あきらめることなどはできません。この問題を少しでも早く解決すべくもっと収入の多い仕事はないものかと研究したのですが、望んでいるような収入を得られる所はほとんどありませんでした。そして最後に考えついたのは、し尿浄化槽清掃車の運転手として働くことでした。この仕事でも多くの祝福を受けました。共に働く人々から多くのものを学び、資金の方も、今年1月までの8カ月間で、今まで2年半働いて貯えたと同じ位の額を準備することができました。また教会においても、新しいメルケゼデク神権MIAのプログラムに参加することによって霊的な面において訓練され、すべて用意ができました。「熱心に求め、常に祈りて信ぜよ。もし汝ら正しく道を歩み、汝らの互いに結びたる誓約を憶えなば、何事も結局は好都合となるべし」（教義と聖約90：24）と、神は私たちに約束なさいました。これが真実であると証します。

私は、今宣教師として働いていて多くの祝福を受けております。多くの日本人、アメリカ人宣教師たちが福音を宣べ伝えるときに喜びを見いだしていることを知っています。

1831年に主なる神が言われたように、全世界に出で行き、一切の生くる者に福音を説くこと（教義と聖約65：2参照）を聖徒らは忠実に守ってきたに違いありません。教会設立頭初、真冬の厳しい寒さの中に、病に臥していた床を取り上げ、かけていた毛布を外套の代りにして旅に出たという記録がありません。このような素晴らしい伝統が代々受け継がれ、現在のように福音が世界中に広がるに至ったのでしょうか。「神の王国の鍵はこの世の人の手に委任され、福音はここより転じ行き世の果にまでも達せん。あたかも人手によらず山より切り出されたる石の転がり出でて、ついに全世界に充ち満つるが如し。」（教義と聖約65：2）また会員も少なく、厳しい状態のときにジョセフ・スミスに啓示された神の言葉は聖徒たちを驚かし、それと同時に大きな希望を与えたことでしょうか。今やこれらは現実のものとなっています。都市ごとに回復された教会が建てられ、数多くの人々が祝福を分かち合っています。私は末日聖徒イエス・キリスト教会が神様の真の教会であって、現在スパンサー・W・キンボール大管長が神の啓示を受けてこの教会を導いていることを証します。回復されたこの福音を受け入れる人々は、すべて真の幸福を見いだすことを証します。多くの人がこの真理を知ると祈りつつ、すべてをイエス・キリストの御名によって証します。アーメン。

死の瀬戸際から



稲葉豊

日本伝道部
専任宣教師

「われはうみのこ さすらいの……………」

のんびりとオールを揃え 瀬田の唐橋を漕ぎ出したのが1969年11月23日だった。ボート部の新入りにとって練習はつらかった。そんな中でのアップの日、みんなで琵琶湖へ行こうと弁当を持ち、ナックルを漕ぎ出した。とても楽しかった。余りにも楽しかった。そして帰るのを忘れいつしか6人を乗せたボートは大きな湖のど真中にいた。しかもとっくに日は暮れ比叡山が無気味な黒さでそびえていた。

ああ……………このまま沈んでもいい、寒くもない

「オレサムイヤンカ」「ミズダセダセ」「コッチノサイドコゲヘン」という仲間の声も遠くの方から聞こえて来るようである。バウのシートからみんなの顔はもう見えなくなった。見えるはずのcockの顔も見えない。ただ3番のシートの動きに自分も合わせる、それだけだった。ずっと漕ぎっ放しであった。学園紛争のため始業の遅れたその年、私とほかの2、3人を除いては夏休みを終わってから入部して来た人々だった。従ってこの6人の中では、私は4月から練習をはじめただったひとりの新入りだった。この遠漕の間交替はしていなかった。バウのシートが寂しく感じられた。いつの間にか前のシートの動きが止んだ。腰を伸ばそうとシートを後ろに移しそこに仰向けになった。

星がやけに輝いている。きれいだ。星がぶつかったら……………ええっと、イーはミューと何だったけな……………よくもまあ乗り合わせたもんだな……………地球もいっしょかな……………

その時である。「バカヤロー、オラー死ニタクネエゾ、コガンカノアホ！」との声がとんだ。やっと生きのび合宿も終わった。

この合宿の帰りに手にした週刊誌に「モルモン教大挙日本に上陸」の記事があった。「こりゃえらいこっちゃ、安保どころじゃない。ひとりの男がたくさんの奥さんを持つなんて、それだけでなく世の中無茶苦茶なのに、日本はだめになる……………」と考え込んだ。

年が明け1970年に入ると、世は近づくEXPO'70であわただしくなっていた。そんな2月の半ばの土曜日。「モルモン教会について知りたいですか」と外人ふたりに呼びかけられた。ちょうど練習が終わって久しぶりに叔父のところに行く夕方であった。学校の正門をちょっと出たところで会った。

「教会はすぐそこです」とのこと。外人のひとりとは僕と同じ年でテキサスから来た大学生だった。もうひとりとはワシントン州から来たと自己紹介しながら坂を下って行くと、古ぼけたバスケットの台がある庭にきた。その下をくぐり、またびっくりした。もっと古い家があらわれた。石油くさい部屋にすわるとカーテンがひかれ、ニューヨーク博で紹介されたというスライドが始まった。

「あなたはどこから来てどこへ行きますか、どうしてこの地上にいますか」この言葉は私の胸を、ぐさっと突き刺した。死の瀬戸際まで追いつめられた湖の光景がまざまざと思い出された。週刊誌で知っていたモルモン教に機会があれば文句を言おうと思ってきたのだが、スライドの言葉はそんな心を消してしまった。さらにジョセフ・スミスを経験を知らされると、すべてを忘れてしまった。帰るときは正面の門から出た。そしてそこに『末日聖徒イエス・キリスト教会』の名前を見つけた。「ふーん、キリストか」「なるほど」なぜかその日は楽しかった。

家庭集會も進んだあるとき、宣教師は「どうしてバプテスマは受けなければいけませんか」とたずねた。私は、「だってイエス・キリスト様は聖いお方なのにバプテスマを受けられました。私が受けるのはあたりまえです」と答えながら、どうしてこんなわかり切ったことわざわざ聞くのだろうといぶかしく思った。そして3月15日、ヒュー・B・ブラウンという十二使徒にはじめて会った。「こんな人が12人もいるのか、絶対間違いない！」と確信した。そのあくる日の夕方、私は罪の許しを得るための水に沈められるバプテスマを受けた。

しかし、これだけがすべてではない。鹿児島島の小さな土地には両親が生活しており、私は今もひたすらに生きる父と母にそのほとんどを負っている。彼らやまたその父母など私に命を与えてくれた人たちは皆、いい加減に生きようとした人々ではなかった。小手先で問題を解決する類の人でもなかった。彼らの血と汗は今もここに生きている。その生活は続いている。私は彼らが知らなかった土地を知り、彼らが持っていなかった知識を持ち、彼らがやらなかった生き方をやっている。

バプテスマを受けて4年、私は口重き者であり、伝えるべき言葉を持ち合わせていない。しかしこの身をもって、私の人生をもって証となすつもりでいる。

おとずれを

つたえて今は 広き世に

転がり出づる 石とならんや

新聞を配って得たお金と友だちの助けにより、こうして伝道に出る機会を得、もう半ばを過ぎようとしている。この機会を与えて下さったことに感謝している。たしかに神は生きてまします。イエスはキリストであり、神は今も予言者に語っておられる。主の祝福が豊かにあらんことを、イエス・キリストの御名によって証する。アーメン。

息子たちを伝道に

板倉玉子

名古屋第5支部

私の信仰生活は、もう19年ほどになります。戦後ただ食べることだけに追われた生活の中で、3人の子供をどう育ててよいものか自信がありませんでした。当時何か信仰を持ちたいと思っておりました。その折りに、ふたりの宣教師が私の家に来られました。初め言葉が聞き取りにくかったのですが1時間くらいお話した後、少し迷いましたけれど次の集会の約束をいたしました。いつも約束の時間をきちんと守って下さるのには驚いておりました。ある台風のような日、きょうはいらっしゃるまいと思っていたところ、ズボンのすそをびしょりにして約束の時間に見えられたときは本当に胸を打たれてしまいました。また家庭集会では、まだ良く知らない人のために温かい心のこもったお祈りがどうしてできるのか不思議な気がし、胸が一杯になって涙がこぼれることもありました。宣教師の方に「いつも謙遜な心をもってお祈りをして下さい」と言われました。ちょうどその頃、主人の会社が思わしくなく、私も働き口を見つけようと毎朝新聞を見ておりましたが、ふとお祈りのことを思い出して、私事のお願ひでも良いのかわかりませんでしたけれど心を込めてお祈り致しました。すると半日ほどして女の人が、保険のセールスの仕事をすすめて来られました。初めはお断わりしていましたが、その方の熱心さと、主人も「一度やってみてできなければ仕方がないではないか」と言いますので、翌日から出かけることになり、そして今年で19年目になってしまいました。この経験から、神様の前にへりくだり、心を込めてお祈りをするとき、その願ひはかなえられることを知りました。

宣教師はいつも「謙遜になって下さい。心からお祈りをして下さい。学んだことを日常の生活に取り入れて下さい」と教えて下さいました。私は早速仕事の上にも取り入れなくてはいけないと思いました。工作中、時には冷たい態度が返ってくることもあります。そんなとき、宣教師の方もこのような思いをなさるのだろうかと思って我慢致しました。

そして家庭集会を重ねますうちに、私はふたりの息子を伝道に出したいと思うようになりました。教会は遠いので交通

費のことや本を買うことなどいろいろ心配しましたが、祝福されひどく困ることもなく通うことができました。

やがて長男が大学に入り、伝道にと思っただけで、主人が軽い高血圧症にかかり伝道はあきらめてしまいました。そして長男が大学を卒業したときには私が病気になって1年ほど会社を休みました。その後1年3カ月ほどして主人は他界してしまいました。

長男の結婚した年の8月に息子夫婦と私と次男の4人がハワイ神殿に行くことになりました。ハワイ空港では温かい歓迎を受け、美しいレイの花の香りが今でも忘れられません。神殿はエデンの園を思わせるほど美しく神聖な感じを受けました。私はそこで大変うれしい事がありました。それは、私の家に初めて訪問して下さいた宣教師であった堀上家族にお会いすることができたのです。神殿の儀式を終えて最後の2日間を堀上家族の家でお世話になりました。その犠牲と愛を忘れないで生活して行きたいと思っております。

大学3年を終え、次男の東夫から伝道に出ることを話されたときは、その費用をどのようにしたら出せるのか少し心配になりましたが、スポンサーからの援助をいただくことになりました。東夫からの最初の手紙に「伝道に出て初めてお母さんの仕事がいかに大変かがよくわかりました」と書いてありました。私も仕事を始めた頃の苦しいことを思い出すと、ひとりでも多くの方が宣教師のお話を聞いて幸せになって欲しいと思うのです。そして私も仕事を一生懸命致しましたので、伝道の費用として少しですが送ることができました。今は伝道も終え、学校を卒業して無事就職しております。

19年をふり返り、いろいろな問題を苦しい中にも解決して行くとき、神様の大きな祝福を感じます。神様の仕事をするとき必ず助けがありますことも証致します。今3歳の孫がおります。その子が伝道に出るまで、私も元気に生きて行きたいと思っております。

母の死に耐えるサンタクロース

山下統紹

日本西部伝道部
専任宣教師

宣教師の喜びといえば、第1に福音を宣べ伝えることであり、第2は、自分宛の手紙を読むことです。

ある寒さの厳しい朝のこと、同僚のハブキン長老は、自分宛に6通も届いていると喜びながら手紙を読み始めました。間もなく彼の顔から笑みが消え、しばらく沈黙が続きました。それはお兄さんからの手紙で、「母、キトク」との知らせだったのです。宣教師にこのような事態が起こったとき、伝道部長はすぐにも帰国の手続きをして下さいます。ですから、彼の気持次第で、今すぐ伝道を打ち切って帰国できる状態でした。しかし彼はそうはしませんでした。その日、いつものように十時半になると、「私には今、神様の子供たちを



東夫兄弟（右端）が伝道に出かけられる日、駅で。
3人のお子さんに囲まれた板倉姉妹（左から2番目）

救うことの方が大切です」と言わんばかりに「伝道に出かけましょう」と言ったのです。私は胸がつまるような思いでした。何と言ってよいのかわからず、とにかくハプキン長老の好きなようにしてあげようと思っただけでいっしょに出かけました。初期の開拓時代に、いかなる困苦をも物ともしなかったあのモルモンの血が、今も脈々として、彼の体の中を流れ続けていたのです。おそらく彼の胸中には「わたしよりも父または母を愛する者は、わたしにふさわしくない。……また自分の十字架をとってわたしに従ってこない者はわたしにふさわしくない。」(マタイ10:37, 38)「よく聞いておくがよい。だれでも神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子を捨てたものは、必ずこの時代ではその幾倍もを受け、また、きたるべき世では永遠の生命を受けるのである。」(ルカ18:29, 30)という救い主の言葉が幾度となく去来したことでしょう。

それから悲痛と戦いながら、すべてを主にゆだねて伝道を続けました。冷やかな人々の対応、身を切るような冷たい風、あらまじりの雨が容赦なく彼の心の傷口をさらに痛めつける、そんな日が2週間続きました。

そして、クリスマスイブ……彼は見事なサンタクロースになって雪の降りしきる宇部の町で、我を忘れて道行く人々に大声で「メリー・クリスマス！ ホッホッホー、メリー・クリスマス！」と呼びかけ、たくさんの人を慰め、祝福したのです。夜も更け、まっ白い雪にすっかり包まれた街々を天使の歌うなぐさめの歌がひびいているような、みたまに満たされ、神様本当にありがとうございます！と思わず叫びたいような美しいクリスマスイブでした。

「お母さんが亡くなられた」という悲しい連絡が伝道部長より入ったのはその翌朝のことでした。

なぜ…クリスマスの日に…昨晩はあんなにすばらしいイブだったのに、とても信じ難いことでした。夕方には会員と共に街頭伝道する、クリスマス特別プログラムが予定されており、ハプキン長老は再びサンタクロースになるはずでした。彼を除く他の3人の宣教師の心配にもかかわらず、予定通り彼は再びサンタクロースの服を着ました。やがて、宇部の街角に「ホッホッホー、メリー・クリスマス、メリー・クリスマス！」という大きな優しい声が何度も何度も響きわたりました。「神様は生きておられます。そしてあなたがたを愛しておられます。本当に！」そう叫んでいるようでした。涙を目

に配ってまわったのです。道行く人々のだれがこのよう

なサンタクロースを心に留めてくれたことでしょうか。スティーブ・ハプキン、そんなに強い人間だろうか、いやむしろ普通よりも弱い人間だと私は思います。そんな彼を今ささえているものはいったい何でありましょう。それは、回復されたイエス・キリストの福音に対する証と確信、それに日本人に対するあふれんばかりの愛なのです。

主により語るとき	愛を語り得ん
罪の道に	さまよう人を探し得ん
主に導かれなば	道はくらくとも
よきおとずれを響かせん	み心のままに
世の広き畑には	いやしき地あり
われ其処に主のため	はたらき果てん
主の愛を知りては	すべてをゆだねて
心の誠つくさん	み心のままに
主よ、みむねのまま行かん	
海、山、野を越え	
主よ、みむねのまま言わん	
みむねに添いまさん	(讚美歌 100番)

流れる讚美歌のごとき主に対する忠誠と信頼、そして羊飼として召された者の、飢え仿う羊たちを何にかえても主のもとに連れ戻そうとするその深い愛を、ハプキン長老は教えてくれました。

たとえ転任により彼がこの町から去って行く日が必ず来るとしても、この宇部の町に彼が残した真実の愛と証は、ここに住む会員一人一人の心の中に信仰のかがり火となって絶えることなく、いつまでも燃え続けることでしょう。

確かに、このような偉大な愛を持った宣教師がいたからこそ私たちは福音を聞くことができたのです。彼はこれからも若き主の使いとして、すべてを忍び、すべてを信じ、すべてを望みながら、この回復されたイエス・キリストの真の教えを宣べ伝え続けてゆくことでしょう。私の話も終りに近づいた今、私と共にこの証を読まれる多くの人々が、このような神から遣わされた偉大な宣教師たちに感謝の念をあふれさせているに違いありません。

しかし、このことは憶えておかなければならないと思います。1年半の後、無事主の務めを果たして帰国する彼を暖かく迎えてくれるはずであった彼のお母さんは、もうこの世にはいないことを。

辞典の中に、犠牲とは「ある目的のために、その人の生命やかけ替えの無いものを提供すること」とありました。

全人類の罪の埋め合わせをするために、その御子イエス・キリスト様を犠牲にされ、全人類に昇栄の機会を与えてくださった父なる神様は確かに生きてましまし、今なお私たちを導いておられます。もしそうでないとしたらばこのような偉大な宣教師たちもきついなかったでしょう。

宇部支部にて。1月1日。イエス・キリストの御名により証します。アーメン。

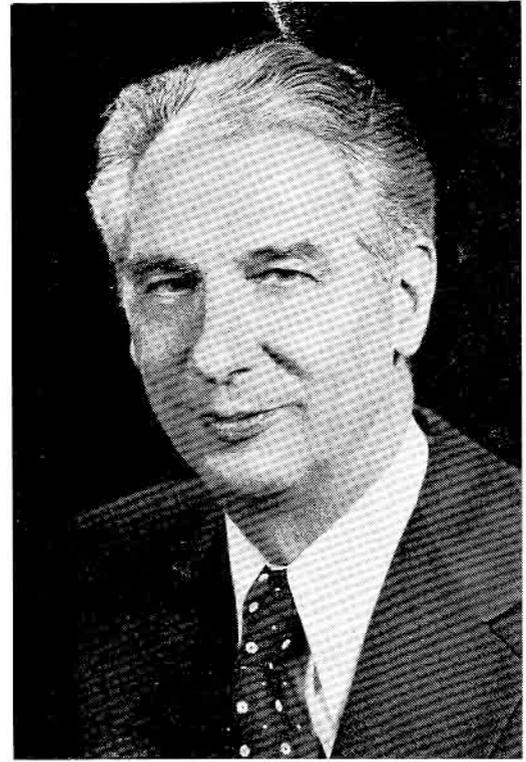


240 中央のサンタクロースがハプキン長老、右端が山下長老。古谷家族と共に。

新しい教会幹部

新たに十二使徒評議員会会員として召されたのは、これまで十二使徒評議員会補助の職にあったL・トム・ペリー長老（51歳）である。十二使徒評議員会補助には、現在教会内務伝達委員会実務部長の職にあるJ・トーマス・ファイアンズ長老（55歳）、1970年6月以来教会教育委員長として活躍してきたニール・A・マックスウェル長老（47歳）が支持された。

ペリー長老はこれまで空席となっていた十二使徒評議員会の席をうめることになるが、十二使徒評議員会補助はこの支持により総勢19名となり、1941年に初めて補助が召されて以来最高を数えることとなった。新たに支持された3名の兄弟は、共にその豊富な経験を新しい責任に生かしていくことになるだろう。



J・トーマス・ファイアンズ
十二使徒評議員会補助



L・トム・ペリー
十二使徒評議員会会員



ニール・A・マックスウェル
十二使徒評議員会補助

「神よ、願わくは私たちがまた私たちと共にあるすべての人々が、私たちではなく聖なる神よりのものに心を留めて生活することができるように。私は道を見失った人々が、永遠の生命という偉大な目標に向かって高く歩みを進める力を得、決心をすることができるように、また私自身説得だけでなく最も価値ある行ないを通して模範を示すことができるように心より祈る次第である。

私はここに再び、主がマルタに言われたあの深遠な言葉が真実であることを慎んで証する。「わたしはよみがえりであり、命である。わたしを信じる者は、たとえ死んでも生きる。」（ヨハネ11：25）

私もまた、みたまの導きのままに心底から証をのべたマルタと同じ気持ちをもって証できることを神に感謝する。

「主よ、信じます。（私もまた）あなたがこの世に（来られた）キリスト、神の御子であると信じております。（ヨハネ11：27参照）

ハロルド・B・リー大管長 大会説教
(1973年10月7日)